

第8回銀華文学賞発表

銀華文学賞

銀華文学賞もおかげさまで八回を迎えることができました。今回もまた日本全国およびアメリカ、インド、ブラジル、フランスなど海外から、四十一篇の作品が寄せられました。心から御礼申し上げます。

多数の応募作の中から、選考委員／大高雅博・八覚正大・小沢美智恵・都築隆広・五十嵐勉による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。今回もさらに歴史小説に優秀な作品が目立ち、昨年新設した歴史小説賞を継続させていただきました。

また本年も故河林満を偲んで、御遺族の御厚意により河林満賞を選出させていただきました。

なお、誌面の都合により、奨励賞などの作品は四五号以降に順次掲載させていただきます。御期待ください。

第八回銀華文学賞授賞式・祝賀会および懇親会は、二〇一二年一月二十八日（土曜日）午後二時より東京の大田区民プラザにて「文芸思潮」エッセイ賞／現代詩賞／イラスト・漫画賞といっしょに行なう予定です。どなたでも御参加可能ですので、どうぞお誘いの上御来場ください。

第九回銀華文学賞も昨年とほぼ同じ要領で行ないます。皆様の御応募を心からお待ちしております。

※選考に当たり、小林広一氏、早川ゆい氏、中野睦夫氏に御協力をいただきました。

当選

「転ぶ女」 冴場 渉（千葉県旭市）

「デスペラード」 牧港誠之（神奈川県横浜市）

河林満賞

「一初」 皆笹麻希江（大阪府大阪市）

歴史小説賞最優秀賞

「淡雪―実朝の死―」 北風嘉己（北海道札幌市）

優秀賞

「埋み火」 土岐田耕（大阪府大阪市）

「言葉は武器なり」 六藍光洋（兵庫県神戸市）

「蓋」 丹羽加奈子（愛知県名古屋市中区）

「片影」 星野 透（埼玉県所沢市）

「仙薬」 上野雄三（福岡県中間市）

「蕎麦の花」 神通明美（富山県富山市）

奨励賞

「一期一会」 寺田 保（北海道函館市）

「萩の器」 北野滋子（大阪府大阪市）

「ポスト」 坂口保典（長野県小諸市）

「宅老所『なごみの園』」 飯島もとめ（長野県長野市）

「青春の守破離」 小林良之（兵庫県三田市）

「リバーズ」 宮澤えふ（兵庫県赤穂市）

「悪霊」 朝永 潔（大阪府大阪市）

「明白な運命」 二宮英郷（東京都渋谷区）

「声が響く」 岡野弘樹（兵庫県加古川市）

「藍色のキャンバス」 宮下浩子（東京都世田谷区）

「闇を抱きしめて」 国方 勲（大阪府枚方市）

「振り込み」 荒井隆志（東京都練馬区）

「ヒヤリハット」 小野友貴枝（神奈川県秦野市）

「妹、幸」 北上 実（新潟県新潟市）

「ラッキー」 平沢裕子（岩手県花巻市）

歴史小説奨励賞

「舞草刀」 久保協一（岩手県盛岡市）

「小倉百人一首実朝歌余談」 尾崎克之（千葉県松戸市）

「北の独裁者の死」 迎来太郎（東京都稲城市）

「異聞保元の乱」 小笠原新（山形県酒田市）

男の華と渴き

八覚 正大



この賞も第八回目を迎えることになった。そんななやってきたのかなと思うが……たしかに選評も八回目になる。うれしいことに質が向上したことは確実に言える。人間が密に終結することの結果だろう。その中から押し上げられるようにして秀作が立ち上がるものだ。

今回、目に吸いついてきた原稿があった。それは牧港誠之の「デスペラード」である。無法者、命知らず、ならず者など多少のニュアンスをもってその英語のタイトルを訳せよう。また映画、音楽にも同様のタイトルのある。が、作者が主人公に与えた目線は一読すれば自ずとわかるであろう。

俗に言う港湾労働者の内部が描かれるが、その現場の言葉遣いが実にうまく使われていて、その実態を知らないものも納得した気持ちになる。その場は流れてきた者たちのある種「吹きだまり」なのだが、その中に高校時代、ラグビーをやり県の決勝にまで進んだ過去をもつ佐々木亨がい

る。語り手のおれは佐々木のことかどこか気になり、仲間として付き合っていく。佐々木は元警察官だったようだ。それが過去に事件を起こし身を落として港湾労働者として働いていたのだ……。

とにかく文が生ききている。労働者仲間の現場の葛藤あり、人間関係あり、飲み屋あり（そこにいる女への佐々木の思いも描かれ）……ラストは、過去の事件で警察に追われていた佐々木が、かつてのラグビー選手の花型を彷彿とさせるステップを踏んで刑事たちをかわすシーンだ……結局捕まってしまう。しかしその一瞬の栄光の再現は眩しいまでに耀きをもって「おれたち」には見えたのだ。

ハードボイルドという言葉やヘミングウェイを持ち出すまでもなく、ここには男の人生の一瞬の華とは何なのか——が見事に描かれている。この作者は、以前にも「沖繩海洋もの」とでもいえそうな優れた描写による秀作を何作も出してはいる。しかし、今回そこから新たな描き方で華麗なステップを踏み直した感がある。以前から作家の自覚はあったと思う。しかし今回あらためて、この作者を「作家」と呼び直したい。純文学に踏みとどまったまま、面白い作品群をさらに創り出してほしいものだ。

そしてもう一人、「作家」と呼ぶにふさわしい作者を見出す。冴場渉である。今回の受賞作は「転ぶ女」だ。過去に愛した女は、今は落ちぶれて病になり葉漬けの日々を送

佳作

- 「津波」 成瀬秋彦（東京都練馬区）
- 「思えばいと疾し」 形山謙一（山形県山形市）
- 「ミュンヘンに死す」 南城堯也（埼玉県日高市）
- 「イエスの島で」 波佐間義之（福岡県中間市）
- 「千花の壁」 来の宮あんず（東京都江東区）
- 「耳たぶ」 吉野光久（神奈川県横浜市）
- 「赤い月夜に」 佐々木国広（滋賀県東近江市）
- 「転校生」 室町 眞（東京都杉並区）
- 「若いメル友」 浦上京子（大阪府寝屋川市）
- 「三代目のカフェ」 奥はじめ（COURTÉVOIE FRANCE）
- 「誰かが静かにやってくる」 山田吉生（栃木県宇都宮市）
- 「三日間」 耕田みずき（北海道札幌市）
- 「笛の誼」 三山晃生（埼玉県深谷市）
- 「桜」 小林理樹（東京都小金井市）
- 「三凶神」 秦純四郎（北海道小樽市）
- 「微笑み返し」 折口 真（埼玉県所沢市）
- 「夢想の雲」 大和川義之（大阪府堺市）

- 「鮎返しの滝」 中川ガバチャ（和歌山県和歌山市）
- 「原っぱの幽霊」 小笠原幹夫（埼玉県狭山市）
- 「心残り」 富田鈴子（愛知県名古屋市中区）
- 「鮎」 藤沢辰雄（奈良県大和郡）
- 「聖夜に舞う雪」 松尾 修（長野県上伊那郡）
- 「晩秋の稜線」 宇和静樹（大阪府堺市）
- 「駅前茶屋日録」 久間一秋（福岡県小郡市）
- 「ペーパー・フラワーズ」 潤野恵子（東京都江戸川区）
- 「波の裏」 成瀬健太郎（神奈川県藤沢市）
- 「喫水線」 田浦夏美（東京都練馬区）

歴史小説賞佳作

- 「三増峠」 松田征士（東京都町田市）
- 「遠い灯」 岡本 晶（京都府宇治市）
- 「幻の松尾城」 吉田満春（千葉県山武市）
- 「七良屋の達磨」 碧居泰守（千葉県松戸市）
- 「じろう」 木山省二（東京都板橋区）
- 「残照」 上田英博（高知県香南市）

っている。その女を再訪する男のまなざしは、取り切れない責任を未だ抱えつつ、痛ましくやさしく切ない。その様が見事に描かれている。

実は彼は「哀愁のティラノ」(ティラノはティラノザウルスとのこと※編集部注)この作品は「決別の川」と改題して文芸思潮26号に掲載)という作品を何年前だろうか、書いたことがある。主人公の男から見た過去の女・家族への視線が、人生の経験を経た男の自負と切ない痛み・疲弊を伴った見事な表現として表わされていたと思う。そのときから注目してきたのだが、少し生々しすぎる「骨肉の町」などを経て、今回、ここまで一人の女との関わりをまざる男を描いている。「デスベラード」が、男の過去の華の再現という「表」とするならば、この「転ぶ女」は、かつて快楽を共有しあった仲間への鎮魂という「裏」の顔である。その鎮魂は惨めな姿をさらす相手へのまなざしだ。男が逃げたようなラストだが、しかし男は逃げてはいない。その痛ましさを自らの内に内在化させ背負っているのだ。《哀しくはなかった。ただ、渴いた気分がした》という一行は、この作品の掉尾を飾るにふさわしい。

今は亡き、小生の文学の戦友・河林満の傑作に「渴水」という小説があった。内容をここで書くつもりはないが、男の哀切さは詰まるところ「渴き」に行きつくのかもしれない。

縄が生き続ける意味——が、今一つ鮮明に見えなかったのかも知れない。力のある作者なので今回は選者たちが辛かったと思われる。

「ペーパー・フラワーズ」(潤野恵子) 神経を病み、後年認知症の入った母親を介護する娘と父親。ラスト近くの、母親がトイレの中に閉じこもり紙の花を溢れるほどに作ったシーンは圧巻。

「ボスト」(坂口保典) 現代の集合住宅事情が実によく描かれている。筆者も団地住まいであり、理事も経験しているので、このようなエキセントリックな事態にはリアリティが感じられる。内容の点では優秀賞と思われる。文はもう少し推敲されて描写を鍛えてほしい。

「宅老所」(なごみの園) (飯島もとめ) 一人ひとりの登場人物への暖かいまなざしが、なかなか良い。読んでいて気持ちや和んでくる。ただ、どこかエッセイ的ではあるの。小説としての評価は今一つだった。

「仙葉」(上野雄三) 発想や導入はなかなかだし面白くは読めたのだが、やはりあり得ない? と思わせる点、饒舌すぎる点がやや興冷めだった。

「闇を抱きしめて」(国方勲) 人間的な美術の教師の生き方を、若い教師の視点から見た小説。少し前の時代の教員と学校制度はよく描かれているが、この美術教師の闇、芸術性の部分が今一つ伝わってこなかったのが残念。

歴史小説部門で良かったのは、「淡雪—実朝の死—」(北風嘉巳)と「小倉百人一首実朝歌余談」(尾崎克之)の二作である。両者とも実朝を扱っている。前者はわかりやすく読みやすい。ただラストが少し弱い気がした。後者は実朝暗殺を扱った少しミステリアスなものでディテールと歌の多用が読ませた。ただ、その真実性はなかなか検証し

たく評価は分かれるかもしれない。『金槐和歌集』を一応目を通して選考に臨んだが、情景を詠む歌が多い中で心の苦しみや個の絶唱のようなものは、古にあって近代の自我の芽生えを先取りしたようにやはり驚きを禁じ得ない。

「舞草刀」(久保協二) は迫力は感じたのだが、忍びの者の活躍への焦点の当て方が唐突だったりわかりにくかったりした。忍びの者を用いた者の意図か、用いられた者の生きざまかのどちらかに焦点を絞って描いてもらいたかった。以下は感想程度だが、印象に残った作品に触れてみたい。

「蓋」(丹羽加奈子) タイで事故に遭い頭蓋の一部を失った男の話。発想が面白く、ふた、ふた、ふたというリフレインが効いている。過去に三人の子を育て苦勞した再婚の女房が、しっかりと蓋となったという感覚は、けっこうピタッと嵌った感じがした。

「愛華」(丸山史) 文はなかなか良く沖繩の女性のおおらかな姿が、愛華と言う妊娠した高校生に娘になかなかよく表されていたと思われる。優秀賞くらいでも良いと思えたのだが、他の選考委員の支持はあまり得られなかった。沖

「言葉は武器なり」(六藍光洋) パリ留学中に出会ったクメール・ルージュ親派の学生と主人公との交流。年月が経ち、彼が殺されたことをカンボジアの現地に入って知る……; 話題的にはなかなかだが、その学生との出会いから主人公自身がどう変わったのか——そこが描かれていないので、

河林満賞の創設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は銀華文学賞に応募される小説作品を対象にし、銀華文学賞選考委員によって銀華文学賞選考会において同時に選考され、御遺族の承認によって決定されます。

受賞者には賞状、賞品、記念品、賞金五万円が銀華文学賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」

文芸思潮

どこか他人事の域を出ないような印象になってしまったのが残念。

「明白な運命」(二宮英郷) エネルギッシュな文体と性描写を得意とする作者。銀華文学賞の常連中の常連。スケールの大きさや、性のおおらかさはこの作者ならではのもの。しかし今回は、ちよつと大きすぎる時代の内容をやや粗っぽく捉えた感が……。

「蕎麦の花」(神通明美) 事故で怪我をした男性が、過去に情を通じた女性から励まされ回復していく話。俳句もなかなかとは思いますが、少し男性の独りよがりな感も。

「藍色のキャンバス」(宮下浩子) 公園で出会った六十代の男の絵を売ってあげる九十歳の老女の思い。ちよつと着想は面白かったが、絵の描写などもっとほしい。

「振り込み」(荒井隆志) 売り物の古札を取り替えて借金を返した男。しかしその行為を見られ強請られる……。設定、発想などなかなか読ませた。しかし、ラストお金を払ってしまふところが、何か尻切れトンボと言う感じ。

「ラッキー」(平沢裕子) 息子を自死させてしまった母親のそれからの人生。施設で飼われていた犬に息子を投影する情の部分はなかなかだが、息子が自死するところは唐突。病死とか事故死の方が……。

「一期一会」(寺田保) 召集された男性が戦場での負傷者薬殺の事実を知る……。内容は重く、迫力も感じられるが、

覚がほしかった。

「喫水線」(田浦夏美) 夫と叔母との三人生活に嫌気がさした主人公の女性の話。シチュエーションと叔母コンプレックスの男性は描けているがラストが平凡。タイトルに溺れた? 感じ。

「天使の仮面」(鶴飼勝) 香港に逃げ、客引きをするようになった男の話。親切な男の仮面はわかるしラストも良いが、テーマがわかりにくい。

「文が痛い」(鈴木英夫) これも常連の作者。発想はわからないでもないが、メールのやり取りの域を抜けてはいかず、人間の情の部分の絡みが感じられない。メールの持つ限界をえぐり出すとか、実際に出会って意外な出来事が起こるか……もっと展開を期待する。

「一初」(皆笹麻希江) 浮気の話。飄々としたところが読ませる。かなり力のある作者だが、うまさの先に立って、考えさせるようなところは感じられなかった。

「イエスの島で」(波佐間義之) カネミ油の事件を追ったテーマは重いものだが、一人の妊婦に背負わせてしまったのは重すぎて暗く、読んでいて切ない。岩に昇華させてしまふのは逆に文学としては物足りなかった。

どこか幻想と事実が混在してしまっているようで、読んでいると何かわからなくなってしまう。一度会っただけの女性、さらに出てきたり、幻想なのか……。

「津波」(成瀬秋彦) 中年デザイナーの若い同僚への嫉妬心はよく描かれている。そのような個人的な感情体験と、大地震・津波との関係がもう少しこねれないと……。

「赤い月夜に」(佐々木国広) 幼い娘にいたずらをした労働者をつきとめ撲殺してしまう男の話。恨みの成り済ませたミステリアスな部分は読ませるが、こっそり打ち明けられても読者はどこか戸惑ってしまう。

「波の裏」(成瀬健太郎) 母親の回想と老いるの恋情。文章がしつとりとっていて、情感を感じる。波の裏という表現は納得。

「千花の壁」(来の宮あんず) 姉コンプレックスの主人公の偏執はけつこうよく描かれているし、うまいと思う。しかし世界がどこか怨念的で狭い。それが解かれ拓けていくような部分を描いたら面白いと感じた。

「声が響く」(岡野弘樹) 人格の乖離した少女の姿と母親、それからお祖母ちゃんとの出会い。視点の問題を作者は狙ったのかもしれないが、残念ながらわかりにくかった。

「晩秋の稜線」(宇和静樹) 命の恩人を死刑執行する警吏の話。内容は重く苦しいところはあるのだが、死刑執行官の話はすでに世に出ている。なにかさらにオリジナルな感

文学者としての目

小沢美智恵



今年の候補作には力作が多かった。

応募資格四十五歳以上。さすがが長年書いている作者たちだけあって、なかなかの技術である。

しかし、巧い、面白いとは感じて

も、「受賞作」にふさわしいかとなると今ひとつ決め手がなくて、今年は該当作は出ないかも知れないという思いで選考会に臨んだ。

他の選考委員も似たような気持ちだったらしく、どれを受賞作にするかで長時間話し合いが続いた。

たとえば、土岐田耕「埋み火」は、老齢の男性と若い女性の心の駆け引きが巧みに描かれ、なかなかこうは書けないと感心させられる小説だが、読んでいくうちに男性主人公の自慢話を聞かされているような気がして鼻白んでしまふ。

上野雄三「仙薬」は、不老不死の薬という非現実的な話を巧みな語り口で読ませて、エンターテインメントとしては優れた作品になっているものの、最後の締めくくり方がありがちで、せつかく奇想天外な物語を仕立てたのだから

ら、もつと読者を驚かせるような終わり方はなかったかという欲が残る。

丹羽加奈子「蓋」は、事故で頭蓋骨に穴が空いた男が過去を思い出す話で、穴から様々な記憶が出入りするさまをリズムカルに描くテンポのよさに魅力があるが、読後その描き方しか印象に残らないうらみがある。

星野透「片影」は、昔交際したことのある女性の姿がくつきり浮かび上がる味のある作品だが、本題に入る前が長すぎ、随筆風すぎる嫌いがあった。

また、北風嘉己「淡雪―実朝の死―」や尾崎克之「小倉百人一首実朝余談」、久保協一「舞草刀」など歴史に材を取った作品は、資料をよく調べていてそれぞれ読ませるが、「歴史小説」という型にはまりすぎてはいはしまいか。

そんななかで受賞作として浮上してきたのが、冴場渉「転ぶ女」と牧港誠之「デスペラード」だった。

「転ぶ女」は、還暦に近い男性の語り手が、かつて関係のあった女性・美雪から病氣療養をしているという電話を受け、家に見舞いに行つてずるずる交流を続けてしまう話だが、内部に過剰すぎる「女」を抱えた美雪という女性に際だつたりアリティがある。夫がいながら他の男性ときわどい関係を持つて恥じない彼女と語り手の関係はおぞましいといつていい様相を呈するし、内容に救いもないのだが、身勝手な女の存在感が確かに残り、そこに固有の人生があ

ることを感じさせる。

この美雪のような生き方は、良識的な世界からは負の部分として排除される類のものだろう。一般社会で生活している人々は、その排除された部分を黙殺、あるいは見まいとする。しかし実際にわたしたちの生きる世界というのは、排除されたとまじいものをも包みこんだ、より大きな象徴的宇宙として把握されなければならないものである。文学の役割のひとつが、そういう排除された部分を表現することであるなら、人間の負の面をしっかりと見据えた「転ぶ女」は、文学たりえていえるのではないか。

そのような負の部分を負った人物を描いているという点では、「デスペラード」も同じで、主人公の仕事仲間・佐々木が、物語が進むにつれ警察に追われるような犯罪型の人物だということが明らかになってくる。この作品は主人公たちの仕事である港湾作業の実際を詳細に描いてもおり、その筆力に安定感もある。

授賞にあたっては、この二作者が当文学賞の常連の入賞者であり、選考委員が彼らの作品を複数読んできたということもプラスに働いた。「この二人の作品には作家性がある」と評した委員がいたが、一連の作品を読んで、わたしもその評言が本質をついていると感じた。

小説家は小説を書いているときだけ小説家であるのではないだろう。映画を見ているときでも、スーパーで買い物

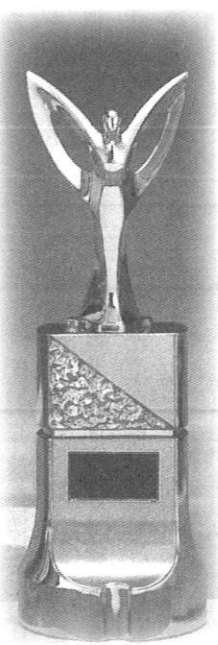
圧倒的な筆力

大高雅博



しているときでも、恋愛しているときでも、常に文学的に物事をとらえる訓練を無意識のうちにしている。文学者として実人生にたずさわると、その文学者としての目が、二作品には色濃く反映している気がしたのである。

最後になったが、河林満賞には、皆笹麻希江「一初」が選ばれた。六十七歳になるフォトスタジオの店主が、パートの面接に来た綾乃という女性に一目惚れして囲う話である。妻と娘に隠れてうまいことをしているはずの店主・猛男が、いつのまにか女たちにしてやられている感じが、関西弁をうまく使つて軽妙に語られている。女の強さを標榜してまことにうまくできた小説だが、妾宅の庭に咲く花の名前「一初」をタイトルにしたところが、わたしには惜しく思われた。作者は使者という花言葉を使つて作品とタイトルを結びつけ、そこに意味を持たせようとしたのかも知れないが、作品の自然の流れに従つてあっさり終わらせ、タイトルも直球勝負でつけたほうがずっとよかつたのではないか。



今回は大地震があり、早くも、それを取り込んだ作品が最終選考にも何作が残つたということが特筆される。ただ、震災に遭われた方が、それを小説にするには余りにも時間がないと思われ、その周辺か、外側の人の手によるものと考えられる。かなり微妙な問題があり、描き方は難しい。震災を自分が受けたのと同じような真摯な気持ちで書かれているのがわかる作品もあるが、今回は上位には推せなかつた。震災を扱うには、より繊細な、別のやり方が必要なのだろう。

また今回、かなりの作品でありながら、この人の力量であれば、これくらいは当然であり、前よりは良くないという理由で、上位に上がれなかったものもある。八回目ともなると色々な採点要素が入ってくる。

さて、今回の当選作であるが、牧港誠之「デスペラード」冴場渉「転ぶ女」に決定した。両者とも前から力量は評価されていた。牧港氏は沖縄の海を題材とした存在感のあ

る作品があり、筆力は認められていた。最近では都会に題材を取ったものに変わっているが、前作は主要人物設定に無理があるようだった。今回は纏まりが見られる。ただ、結末については、賛否が分かれた。人物達には存在感はあるのだが、さあ、それでというようなことがあるのも事実である。

冨場氏は、昨年の優秀賞「骨肉の町」の印象が強い。「骨肉の町」は兄弟の確執の話であったが、今回は男と女の話であり、良くも悪くも病気であるその女性の存在感が凄く。前作とは全く違ったシチュエーションで、選考会当日まで、「骨肉の町」の作者とは気が付かなかった。こちらも結末がどうかという気はしなくてもないが、両者とも圧倒的な筆力があつたように思う。

今回時代物で選ばれたうち二作が源実朝に関するものであった。北風嘉己「淡雪―実朝の死―」は一般的イメージとは違う名君としての実朝であり、尾崎克之「小倉百人一首実朝歌余談」は詩歌の方に重きがある。実際、詩歌の解釈というような所に進むと、よくわからない部分ができ、評価が難しくなる。下読みの段階で、高句麗の話があり時代物としては良いと思つたが、最終には残れなかった。時代物の範囲については検討の余地があるかもしれない。

優秀賞では上野雄三「仙薬」が高得点を集めた。長寿菓の話で、中々巧みであるが、結末がもうひとひねり欲しか

または、そこまでいたっていないものもある。どこまでが経験で、資料に基づくものかわからないものもある。要は、どこまで、資料、自分の思いを消化して、小説化するかということになるのであるが、この間の距離感というようなものが、難しい。格闘して下さい。

クメントモリ 死を想えよ は間隙の時代に

都築隆広



上位争いは、「デスペラード」「仙薬」「蓋」「転ぶ女」そこに「片影」「埋み火」が迫った、といったところでありましょうか。

当選作となった「デスペラード」は作中にイーグルスの楽曲だと説明

があります。三十代男子ならアントニオ・パンデラス主演の銃アクション映画を連想するかも知れません。これが若者向けの雑誌でしたら、「え？ 当選作のタイトルが『デスペラード』？」と難色を示しますが、六十七歳の作者が書き、高齢者の投稿によって支えられる銀華文学賞ならユニークだと思ひ、私も推薦しました。何をしているんだかさっぱりわからない港湾労働者達の仕事も筆力できちん

った。神通明美「蕎麦の花」は交通事故で身体が不自由になった男の復活の話である。昔、多少の心の動きがあった年齢の離れた若い女性が現れ、希望を得る。その昔の出来事はもつと、軽い方が普通に思えるのだが、読後感良かったと思う。

奨励賞の国方勲「闇を抱きしめて」は進学校内部での、先生達の確執であり、中では美術教師の描き方が良かった。ある時代を写し取っている感じがして興味深く読ませていただいた。ただ、興味ある素材だけにもう少し整理した方がよいかも知れない。

朝永潔「悪霊」は、学園もの、いじめを題材としたホラー小説であるが、最初から最後まで安定した緊張感があり面白かった。いじめられている方が逆転するのはなかなかのアイデアだ。もつと、長い方が良いのではとの声もあつた。さらに先まで進めてもよいかも知れない。

宮下浩子「藍色のキャンパス」は、九十歳の女性がホームレスのような画家の絵を売り歩くというような話で、印象的であつた。

宮澤えふ「リバース」は前世占いのようなものを使いがらちよつと、しゃれた物語にしている。

この他にも、クメール・ルージュ、カネミ油症、死刑執行、マンション問題と、書かなければならない題材を元にしているものが目立つ。中にはうまくいっているものもあり、

読ませ、なんといっても、ラストシーンのやりとりが男のロマンでした。ちなみに、「これが男のロマンだったなんて、私は読んでいて思いもよらなかった」とは小沢美智恵選考委員の弁であります。女にはわからない世界なのです。

もう一つの当選作は「転ぶ女」。女のわがままがリアルといえますか、なんともひどい性格で、それに拮抗するぐらゐ男性の性格も悪い。その一癖も二癖もある人間ドラマが何故だか味わい深く、これもまた読ませます。また優秀賞の「埋み火」や「片影」も同系統の作品だと思ひました。恋愛における男の傲慢さや思い込みの強さがよく描かれていて、シリアスなのに滑稽で、しかし技術的には高度でした。ただ、その昔、山田詠美氏が文学界新人賞の選評で候補作に対して再三、こぼしていたように「登場人物達の関係が素敵じゃない」という評が、この三作にも当てはまります。即ち「自分が今、書いている小説の人物達は、他人から見ても、素敵な人間関係を築けているのだろうか？」という問題で、文学性とは直接、関わりませんが、芸誌というステージで小説を書くにはやはり頭を悩ませるべき事柄ではないでしょうか。

続いて、「仙薬」は典型的な魔術的リアリズム小説です。ありそうもない話なのに、物語が巧みでありそうに見える。特に財布を届けたという、ありふれた語り出しが効果的でした。異界へと読者を導くには、ありふれた場所から誘わ

ねばなりません。でも、オチはいまいちでした。最後さえ書き換えられていけば、当選作だったでしょう。

「蓋」は文章がリズムカルですらすら読めます。この小説に登場するタイのシラチャーには私も一ヶ月程、滞在したことがあって、信号もないような最悪の交通事情の場所です。ここなら交通事故も起ります。この作品も幻想的な内容に反し、実話っぽい要素がある点が支持できました。

私のイチオシ作品は上位争いには参加できなかった奨励賞の「一期一会」。東北関東大震災の破壊を直接描くよりも、それを連想させる戦時中を描いた方が今の時代の風潮に合っているのではないかというのが持論ですが、戦争体験者にしか描くことができない、真摯な内容が世代に関係なくストリートに届きます。原稿用紙三三枚とは思えぬ内容で、特に後半に登場するCOLな看護婦のキャラクターに惹かれました。その反面、再登場したヒロインが幻想めいているとの批判が選考委員から相次ぎ、確かに細部は矛盾だらけで弁護しきれませんでした。

下読み委員の間で話題沸騰だったのは、姑のような夫の叔母とのバトルを描いた「喫水線」です。ただ、「単なる嫁姑ドラマなのでは？」という五十嵐編集長の鋭いツッコミにぐうの音も出ず、佳作止まりでした。もし、「下読み賞」なる枠がございましたら、橋田壽賀子ドラマの熱心な視聴者でもあるこの私が、個人的に差しあげたいところです。

の方針通り、数にはこだわらず、あくまで作品の質を重視し、レベルとして高いものはすべて三次予選以上とした。

このグループだけでなく、一次通過レベルでもかなりアップしており、それぞれにある程度の普遍的な内質を備えていて、箸にも棒にもかからない未熟な作品はほとんど姿を消した観がある。これらのことは、応募者の力が鍛錬によって上がっていると同時に、力量豊かな書き手が、この賞に眼を向け、応募してくるようになった側面も表しているだろう。経歴を見ると、一流新聞の元デスクとか、有力な賞の最終候補作家とか、華々しいキャリアが目立つ。いきおい三次予選以上は激戦で、百花撩乱の饗宴に、選考委員は候補作の多さを含めて戸惑いかなり迷ったというのが本音である。

しかし全体のレベルは上がったということは実感しても、トップの最優秀賞をどれにするか、銀華文学賞の顔として推せるかという段になると、さらに要求が高くなることも否定し得ない事実である。その点では、今回断然というほど突き抜けたものはなく、何が何でもという意気込みで推薦できる作品はなかった。優秀賞以上はほとんど並んでおり、どれが当選となってもおかしくはなかった。

最優秀賞に輝いた冴場渉氏の「転ぶ女」は、女性のなやかなよりかかる一面の権化を見事に人格化して、その姿を悲劇にまで追い詰めている。冴場氏は奨励賞や優秀賞に

ところで、今回の選考会で上位が「津波」ネタで占められているようなら反対しようと思ったのですが、他の選考委員の方々も同じ考えだったらしく、「思えばいと疾し」津波「転校生」といった「津波」をテーマにした作品はいずれもふるいませんでした。三作とも人間ドラマは上手かったのですが、やはり人命が失われている問題なので、発表時期が早すぎました。人々が破壊を忘れかけ、次の大事件が起るまでの間隙の時代が、必ず訪れます。そうした平和のなかで、死を想えよと論ずるうちに、あの「津波」を思い出し、描いてゆくのが一番でしょう。もし五年後、十年後にこれらの作品が発表されていけば、上位陣を入れ替えさせるぐらいの力を秘めていたと思いました。

積み重ねの輝き

五十嵐 勉

第八回目の銀華文学賞は、全体にレベルが上がった。特に三次予選近辺の層はいい作品がたくさん集まって、どれに涙を飲んでもらうか、予選担当者一同で苦慮した。結局当初



何度もなっている銀華文学賞の常連ではあるが、一貫して負の領域の人間の生き様に光を当てている。その虚無的な陰影は、暗鬱な領域を這い回らざるを得なかった氏の人生の苦渋をそのまま投影している。それがまた独特の灰白色のトーンを奏でて、深い味になっている。その人生体験を経て初めて持つことのできる運命への眼差しは、絶望に裏打ちされた光への信仰である。文学によってしか救われない人間の投げ出された姿がそこにある。これまでで最も結晶度の高い作品は、何度もの挫折を越えての到達感がある。その積み重ねの上の輝きに心から賞賛を贈りたい。

同じく当選作となった「デス・ベラード」の牧港誠之氏も、銀華文学賞で何度も注目を集めている作家で、特に沖繩の漁師を題材にした作品は光っていた。今回は横浜の港湾を舞台にした小説で、わかりやすく、まとまりがよかった。私としては沖繩を素材にした作品を読んだときのほうが強烈な印象があり、本質的な輝きを覚えたが、あときは当選作に推しながら同意が得られなかったことに、残念な思いがあった。賞には運というものがあり、それをたぐり寄せるのも力のうちかもしれない。牧港氏も苦渋に満ちた人生を経て、負の領域で力強く生きる者の輝きを描いて、硬質な味を醸している点では、冴場氏と共通したものがあ

るものがある。二人の「男」の作家の軌跡に拍手を送りたい。「埋み火」(土岐田耕)と「一初」(皆笹麻希江)も当選圏内の作品だったが、他の選考委員の支持が得られなかった。

「埋み火」は老年紳士の三五歳年下の女性との精神的な恋愛である。知性や年齢によって抑制されている分よけいに燃焼感が強く、ゲーテの言う「親和力」のようなものによって濃密に燃えさかる男女の性の奥が見える作品となっている。男女間の引き合う力は、年齢差も超え、互いの家庭も超えて炎の柱としてこの世界に立つ熱いエネルギーを開示している点で、恋愛の本質を覗かせている。こういう力が仕事や生き方に還流してくる大きなダイナミズムを匂わせている点でも、ひろがりを感じる。この作品には、大規模なスケールで動く社会のある部分のリアリティが裏打ちされていて、その動きに実際に携わってきた確かな感触が、文章の風格となって香りを高めている。最後がもつと抑制のうちに燃焼を純化できたら、文芸作品としての結晶度が高まっただろう。これだけの恋愛は多くの人が読むものとして残すに値するだろうし、いずれ本にもなるはずなので、そのときにもう一度引き締め、磨いて、純度の高いものにしてほしい。

「一初」は、粋な作品で、流れのよい軽妙なタッチは芸が高い。歯切れよく、小気味いい文のリズムは、低く高く起伏をなしながら流麗な調べを奏でている。関西弁と上方の「異聞保元の乱」(小笠原新)、実朝をめぐる「小倉百人一首実朝歌余談」(尾崎克之)、唐に対して戦い抜いた高句麗の將軍を捉えた「北の独裁者の死」(迎來太郎)など多彩で、佳作を含めてこの領域における熟年層の充実を感じた。

今回優秀賞の数が多かったのも、やはり力を持った作品が多く集まったためで、どの作品も独自の領域を造形していた。六藍光洋氏はエッセイ賞でおなじみの書き手だが、今回「言葉は武器なり」という小説に挑戦し、カンボジアのポル・ポト時代のことを描いて、強烈な世界を切り取った。フランスの留学生カンボジア人の同僚との苦学の交流を通して、クメール・ルージュのために尽くしていた彼が帰国後逆に殺される運命を辿ることで、ポル・ポトの政治の陰惨な一面が体感されるところに、小説としての成立がある。留学生時代の貧しさを貫いて祖国のために献身する彼が、むしろ留学生であったために殺される悲劇性は、カンボジアの殺戮の時代の狂気を戦慄として伝えてくる。あの時代を体験を通して実感として描いている小説は日本の文学ではお目にかからない。価値の高い作品である。ただ、タイトルがテーマを象徴していないのが惜しまれた。「言葉は武器なり」という言葉は留学生時代には外国人であり赤貧に耐える彼にとって苦難を乗り越える赤裸裸な言葉であったことはよく伝わってくるが、帰国後逆にフランス語

気質が生きて文章に溶け込んでいる。男の浮いた心理などをよく捉えて、文体に乗せて生き生きと踊らせている。ところどころにチクリと気のきいた描写や一文が光を放っている。この文章の芸は一流である。読むことのなかに酩酊感を覚えさせてくれるまれな文章は、河林賞に値する。

歴史小説賞は今回たぐさんの秀作が寄せられた。なかなかお目にかからない記録の掘り起こしが多数あって、歴史のおもしろさ、過去の豊かさをあらためて堪能させられた。なかでも鎌倉幕府三代將軍実朝を扱った北風嘉己氏の「淡雪―実朝の死―」は、大江広元を軸に実朝や北条氏の人間群が鮮明に描かれていて、当時の輪郭がくつきりと蘇ってきた。オーソドックスな筆致は、落ち着きがあり、その沈着さが悲劇を浮き上がらせている。知られていることではあるが、その臨場感はあらためて歴史の本質を剔出して、明瞭さを備えている。労作の結晶と言える。

剔出という点では久保協一氏の「舞草刀」も、戦国の東北大名家の存続をめぐる陰謀が緊張感のある筆致で描かれていて、読み応えがあった。その彫琢においては、「淡雪―実朝の死―」に勝るとも劣らないが、題材が知られていない点、また出だしのシーンがチャンバラ風で通俗に受け取られがちな点で損をしている。昨年に続いてよく掘り起こされている力作であることはまちがひなく、持続力をも含めてその力を確認した。歴史小説は、保元の乱を扱った

を学んでいたことが災いして知識層としてツールズレンで虐殺されたとすれば、「言葉は災いなり」という逆のテーマが持ち上がってくる。この関連をどうするのか、考え切っていないように思われた。殺される段階になって、裏切られたにしてもなおかつその言葉を抛り所にし、カンボジアのどこかに書き残していたらすれば、この言葉は真にタイトルになっていただろう。文学としての処理が完結していない恨みがあった。

丹羽加奈子氏の「蓋」は、頭蓋骨を除去して脳が開いたままの意識を興味深く展開していて、意識の一つの存在模様を開き示している。その大胆な設定は評価できる。体験をフィクション化して脳や意識の危うさ、脆さを剔出した手腕は鋭利で、最後も愛情に包まれたユーモアによって災厄を乗り越えるシーンも理知の鮮やかな一閃が走っている。ただ、ここまで見事な構築をしたのなら、さらに深く意識の構造を存在や愛情の根底まで掘り下げられそうな気がもする。奇怪さ、奇妙さだけでなく、恐怖の領域にまで迫り得たら、さらに強烈になっただろうし、愛情というものの力も大きく剔出できただろう。

星野透氏の「片影」は、実に読ませる作品で、文章に宿る心理の翳がコクのある職人芸でひしひしと伝わってくる。よく煮込んだ滋味ある料理を味わっているような気分が堪能させられた。文章としては星野氏と皆笹氏が今回の応募

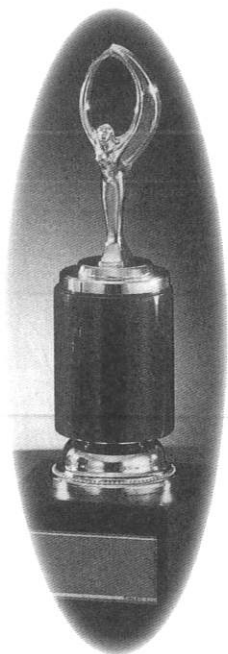
作の中では双璧だろう。文章の機微でじっくりした味を読ませる作品は、そうはない。地味な素材であっても、その女性の姿はいつまでも人生の深い味として残る。たまらな残像がある。続けて河林賞を受賞してもおかしくない作品だった。

神通明美氏の「蕎麦の花」は素朴な作品だが、交通事故ですべてを失った男が、ふとした異性の愛情の記憶で生きる力を得て再生するストーリーである。単純でも、生きる意志を回復する過程は確かな感動があり、フィクションに託された筆者のある体験が籠められているところに、読後感の快い信頼が備わっている。蕎麦畑の白い蝶の描写は胸に残る。

上野雄三氏の「仙葉」は、古典的な題材を現代のグローバル化した世界のなかに復活させたものだが、不老不死の薬を商売にする話を、実にうまくおもしろく作り上げている。この超現実的な、しかもだれもが願望する、あまりにも普遍的な話は、現代に蘇らせようとすると眉唾ものにならざるをえないのだが、それを感じさせずに読ませていく筆力は、きわめて高いものがある。ちなみに予選では最高点で上ってきた。「賽乃目」といういかかわしい主軸の男は小説的な魅力がたっぷり、こういう人物を造形できる手腕だけでも、注目に値する。ここに漂う雰囲気、嘘だとわかっていながらのめりこむ人間の業の深さと繋がって

引きこもり気味の青少年が、逆にある力に取り憑かれ、奇怪なパワーをもって現実を逆転させていく変異の姿を示している。これらは現代の青少年層を浸食しているある奇妙な力を象徴しているようで気にかかった。「悪霊」は筆力のある展開で一気に読ませるが、到達したところは入り口で、これからほんとうの物語が始まるという地点で終わっている。長篇にすればもっといろいろ出てきそうな気配がある。これで評価するのは惜しい気がした。たまたま三作が集まっただけなのか、それともこれが現実の一部を實際に示していて、根はもっと深いのか、時代の恐怖に繋がっている危惧も払拭できなかった。

総じて、銀華文学賞に寄せられてくる作品は質量ともに上がっている。熟年、老年パワーが開花しつつある。次回もさらに大輪の花群を期待したい。



いて、博打や詐欺に身を投じる負のスリルを濃く立ちこめさせている。ただ、最後が時間がなかったせいか、あっさりして物足りなさが残ったため勝ち抜けなかった。編集・発表の段階で推敲してもらったが、それが成功しているかどうかは、読者に委ねたい。力量を買う。次作を見たい。

今回の応募作のなかで、触れておかなければならない作品群が二つある。一つは東北大震災を素材にしたもので、予選から上ってきたものだけで三作あった。「思えばいと疾し」(形山謙一)と「津波」(成瀬秋彦)、「転校生」(室町眞)がその素材だが、タイムリーで話題性はあるし、うまく材料を小説の構築の中に組み込んであるもの、地震と津波という対象があまりに大きすぎて、どうしても真正面からは受け止めきれない物足りなさがある。圧倒的な大自然災害とその底に沈む人間の悲惨さと向き合い、それを文学作品として提示するには、本気で立ち向かっていく覚悟と気合いがいる。「津波」は表現の力も高くそれを心理に重ねる手腕も光っているが、この斜めの姿勢で文学賞に受け入れてしまうと、流行に流れる危険がある。あえて評価を抑えた。

もう一つの気になる作品群は、学校の子供たちの内面の気味悪さを扱ったものである。「悪霊」(朝永潔)、「誰かが静かにやってくる」(山田吉生)、「声が響く」(岡野弘樹)は登校拒否など学校生活でいじめられる立場にある生徒や、



選考会風景／アジア文化社新社屋地下図書室で

授賞式&祝賀会・懇親新年会

読者の皆様、今年も「文芸思潮」銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞・イラスト漫画賞の授賞式および祝賀会・新年懇親会を次のように開催いたします。

どなたでも参加できる楽しい文学の集いです。創作への熱い思いを交わしましょう。どうぞご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

日時●平成二十四年一月二十八日(土)

授賞式午後二時/祝賀会・新年懇親会五時半

会場●東京都大田区民プラザ地下小ホール

東京都大田区下丸子三・二・三

TEL03・3750・1611

※東急・多摩川線「下丸子」駅前

会費・飲食費●授賞式無料、祝賀会一人五千円

問合せ・予約申込●アジア文化社・文芸思潮

TEL03・五七〇六・七八四七(見・五十嵐まで)

または090-8171-9771(ケー)

第9回 銀華文学賞 作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。また埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。今年もどうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。作品をお待ちしています。

●●募集要項

募集内容●オリジナルの短編小説作品。これまで同人雑誌などに発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る(複数応募者は失格とする)。

応募資格●2012年6月30日現在において45歳以上の者

応募規定●400字詰原稿用紙50枚以内(20枚くらいでも可/原稿用紙の場合は必ずA4原稿用紙を使用。B4は失格)。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取って応募のこと(コピーを応募するのが望ましい)。※応募審査料1000円をお願いします。

別紙に①応募部門(2012年度第9回銀華文学賞応募作品と明記)②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日(生年月日のないものは失格)⑤〒(ないものは失格)・住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記入。⑨応募審査料1000円を郵便為替(何も記入しない)で同封。外国からは12USドル。応募者には結果を通知し、希望者は作品をインターネット・ホームページに掲載する。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

文芸思潮「銀華文学賞」係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●銀華文学賞■賞状・トロフィー・賞金20万円(受賞者複数2名の場合は10万円、3名の場合は7万円)

河林満賞■賞状・トロフィー・賞金5万円

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円(数名)

奨励賞■賞状・賞メダル

選考委員●作家集団「塊」メンバー

締切●2012年6月30日(当日消印有効)

発表●予選通過者は2012年11月末発売の「文芸思潮」48号に発表する。受賞作は2013年1月末発売の「文芸思潮」49号に発表掲載。優秀作・奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催●アジア文化社「文芸思潮」

※主催者から

真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、斬新で強靱な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。

※恐縮ですが応募審査料1000円を御協力くださいますようお願い申し上げます。

銀華文学賞選考委員プロフィール

小沢美智恵

おざわ みちえ

1954 茨城県生まれ
千葉大文学部卒
93「妹たち」で川又新人賞受賞
95 評伝「嘆きよ、僕をつらぬけ」で蓮如賞優秀作
06「冬の陽に」で千葉文学賞受賞
日本ペンクラブ会員

大高雅博

おおたか まさひろ

1954 石川県生まれ 日大文学部卒
80「旅する前に」群像新人長編小説賞受賞
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥー・リメンバー」など

都築隆広

つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ 東海大文学部卒
2002「看板屋の恋」で第91回文学界新人賞受賞
「狼を見る」(「文芸思潮」)「ハンコの町の鰻がいる家」(「三田文学」)他
月刊「望星」書評員

八賞正大

はっかく まさひろ

1952 東京生まれ
早大理工学部数学科・都立大仏文科卒
教師・精神対話士
92「十二階」で新潮新人賞受賞
小説「零度の遊び」「イエロークラスター」「父のフレーム」「カウンター」ヤルポ『夜光の時計』など
教育と文学、心理学、精神分析を幅広くつなぎながら文学活動を展開

五十嵐勉

いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ 早大文芸科卒
79「流瀆の島」で群像新人長編小説賞受賞
84-90 タイ在住、カンボジア問題取材しながら東南アジアを遍歴「東南アジア通信」「アジアウェーブ」創刊・編集長
主著に『緑の手紙』(読売新聞インターネット文芸新人賞)・『鉄の光』(健友館文学賞) 他的小説作品に「ノンちゃん、NONGCHAN」、またルポ『微笑みの国タイ』などがある。

転ぶ女

冴場 渉

1

首都高速から側道に下りて最初の信号を左に折れた。一方通行の裏道を矢印の標識に従ってしばらく走ると二車線の車の多い道に出た。路線バスが通う狭い車道を幾度も赤信号に遮られながらさらに十分ほど走ると、行く手に赤い看板を掲げた信用金庫の建物が見えてきた。確かにその場所に違いなかった。すっかり忘れていたはずの道筋を体がまだ憶えているのを知って、なぜか意外な感じを受けた。

道は左手を流れる江戸川と並行して湾岸地域まで通じており、道路と川岸の間に幅一〇〇メートル足らずのベルト

状の土地が延々と続いていた。地価の高い東京ではそんな窮屈な空間にも間口の狭い住居や小店舗が、いかにも下町然とした風情で幾重にも折り重なるように建ち並んでいる。信用金庫の手前から枝道に入り、建物の裏側に設けられた駐車場の鉄柵に車を寄せてエンジンを切った。外に出て周囲を見渡してみた。目に入る景色は以前と余り変わった様子はなかった。頭上には雲の低い冬空が一面に広がり、三月だというのに妙に寒々とした底冷えのする午後だった。煉瓦色に塗られた信用金庫の建物が広いスペースを占めるその場所には、裏手の川岸沿いに三階建てのマンションが一棟あるだけで他に建物はなかった。その様子は古びた

木造家屋が軒端を接して密集する道の向こう側とは異質の情景に見えた。マンションは外壁が薄緑からグレーに塗り替えられており、それが目につく唯一の大きな変化だった。

マンションの前まで行くと一〇三号室という室番号も記憶の奥底からすんなりと出てきた。出入り口の集合ポストに目をやると、名札プレートに見知らぬ姓がパソコンの書体で記入されていた。軽い疑念を抱きながらドアの前に立って、以前はなかったインターフォンの呼び出しボタンを押した。

「鬼嶋さん……」

通話用のマイクから声が聞こえた。

「そうです」

「開いてるから入って」

思いの外しつかりした声音だった。ドアを開けてなかに入った。左手にキッチン、右手に風呂場とトイレ、居間と玄関を区切る数珠球を連ねた暖簾、室内を包む少し黴臭い匂い。何もかも記憶のとおりだった。

暖簾を左右に分けて室内に入ると居間の様子はかなり変化していた。二つあった六畳間はフローリングを張ったワンルームに改装され、広くなった部屋の中央にどこか手術台めいた介護ベッドが置かれていた。

その上に足を投げ出してこちらを見上げる美雪の姿があ

った。ページユの地色に小さなピンクの花柄を散らした綿のパジャマを着ていた。

「ねえ、ひどい顔でしょう」

顔を見るなりそう言った。以前は化粧もろくにしない彼女だったが、やはり女なんだとあらためて思った。

「少し太ったと思えばそれほど変には見えない。薬を止めればすぐ元に戻るさ」

とりあえず根拠のない気休めを口に出して、ベッドの脇に置かれた籐椅子に腰をおろした。本当のところは彼女の美貌ぶりは予想をはるかに越えていた。膠原病患者が多用する薬物の副作用だろうか、美雪の顔は膨れ上がり赤みをおびて不吉に光っていた。どこか日本人離れたオリエンタル風の彫りの深い美貌はすっかり消え失せ、目の輝きが以前の力強さを保っているのがせめてもの救いだっただ。

「よく来てくれたね」

「ああ、電話で聞いて驚いた。とにかくお見舞いにと思っ

て。何が欲しいのかわからないから手ぶらで来たよ」

「いいよ。そんなこと。もう一度会えると思っていなかつたから嬉しい」

美雪は少し怒ったような表情になって小声で言った。その顔を見ていると沈んだ気持ちになった。他人に弱みを見せるのが嫌いでどんなときも突っ張って生きていた女が、柄にもなく殊勝な言葉を口に出したからだ。

三日間突然電話が入り、彼女が病気で寝ていることを知った。受話器を通して聞く美雪の声ははっとするほど弱々しくてさすがに心配になり、何とか仕事のやりくりをつけて見舞いに駆けつけた。電話で病名を聞いていたからネットを検索して少しは知識を仕入れた。ムーンフェースという薬の副作用から生じる特有の症状のことも聞き嚙っていたが、なじみのない病気でその程度が私にはよく分からなかった。しかし、強気な美雪がしおらしい言葉を口にするほどだから、かなり深刻な状態に違いないと思った。

「病院にいないのか」

「月に一度脊椎に注射をするときだけ何日か入院する。後は薬を飲むしか治療の方法がないから家にいるんだ」

「そうか」

「本当にひどいことになっちゃった」

「痛むのか」

「痛いよ。薬のせいでボロボロ。動くたびにどこかの骨が折れるんだもの。昼間は気が紛れてそうでもないけど、夜になると痛くて痛くて。前はもつとひどかったんだ。我慢できなくて死のうと思つて睡眠薬を千錠ためた」

「飲んだのか」

「うん。でも死ねなかった。早めに見つけられちゃって」

美雪ならやりそうなことだった。私と出会う前にも一度手首を切った経歴があったという。そういう激しさを持つ

女だった。

誰に見つけられたかは聞かなかった。いずれ彼女が話すだろうと思つたからだ。

「男を散々騙したからあの世でも呆れているんだろう。当分は死ねないと思つてバカなことはやめるんだな」

「よく言われたよね。ちゃんとご飯を食べて規則正しい生活をしなさいって。言うことを聞かなかったからバチが当たっちゃった」

「そういうことだ……」

美雪とは五年間男女のつきあいを続けてから別れた。その後もときどき電話があり、彼女のいわゆる経済的な窮状を訴えられた。しかし、私は相手にしなかった。甘い顔をするお金を出す羽目になると思つてひたすら避けていた。その頃からすでに十年の歳月が経過していた。

「難病認定は受けたのか」と、まず何よりも気になつていたことを聞いてみた。

「まだ。申請はしているんだけどなかなか認可が出ない」

「治療費が大変だろう。お兄さんたちに出して貰ったのか」

「少しはね。でも不景気だから全部は無理だった。発病してから一年間で六〇〇万掛かった。そんなに出してくれないよ」

「六〇〇万……」

美雪はそうポツリと言つてこちらをにらみつける表情になつた。

「そうか」

いきなり結論を言うのが彼女の話し方の特徴だった。言葉余り知らなくて込み入った事情を上手に説明するのが苦手な彼女には、聞き手のほうが全体を推測して筋書きを立ててやる必要があった。

「あれから結婚したんだな。じゃ治療のお金もその人が出してくれたわけか」

部屋のスペースには不釣り合いなほど大きな衣装ダンスやガラス戸のついた飾り棚など室内の調度はほとんど以前のまま、男が同居している気配はどこにも見出せなかった。ただ、ドアを開けたときに玄関の傘立に釣竿が数本あったのを思い出した。それと郵便受けの名札に記入されていた姓を併せて、美雪に亭主がいることを納得した。

「旅行の費用も出してくれてマンションの残債も全部綺麗にしてくれた」

「不幸中の幸いというところだな。いい人とめぐりあつてよかった」

「でも余り好きじゃないよ」

美雪は少し強い口調で突き放すように言った。実も蓋もない響きの言葉で、表情は明らかに私を責めていた。

数年前の電話のやりとりを思い出した。面倒を見たがっ

ている男が一人いるが、どうしても好きになれないとききに言っていた。美雪が私と縊りを戻したい気持ちでいるのは分かってはいたが、こちらにそのつもりはなかったから相手にしなかった。

「性格が暗い男なの。二枚目ぶっていつも黙ってる。私の面倒がみたいから会社やめるって言うんだけど、あの人が一日中家にいたら息がつまっちゃう」

「いないと困るだろう。ありがたいと思えよ。薬を飲んだときも旦那が見つけてくれて助かったんだろう。その人に出会ってなきゃどんなことになったか考えてみる」

「それはそうだけど」
口を尖らせてそっぽを向く仕種は以前と変わらなかった。自分の非を指摘されると、いつもそんな風にしてふて腐れた。

五年間のつきあいの間、美雪には金のことでも何度もひどい目に遭わされた。知り合った男たちから見境なしに金を借りて必要もない宝石や服を買ひ、その金が返せなくなつて相手から関係を迫られると必ず泣きついてきた。最初からこちらに金の話をすればいいものを、なぜかそれは決してしない女だった。そこに何か彼女なりの美学があったのかも知れないが、私にはそうした行動がどうしても理解できなかつた。彼女はただ金銭的に迷惑を掛けたと思つている様子だった。しかし、私は美雪が他の男と金の貸し借り

美雪は少し考え込むような表情になって続けた。

「私もう一生セックスができない体なんだ。少し強く抱かれただけで肋骨が折れて、それで内臓が潰されて死んでしまふ」

「じゃ旦那とは」
「一度もない」

「でも旦那は君に心底惚れてるよ。旅行のお金も治療費もおまけにマンションの残債まで出してくれたんだらう。会社を辞めて面倒を見たいとまで言ってるんだぜ。そういう人とならやっていけるさ。君が贅沢を言わなければね」

美雪は例によって不満げな顔になり、パジャマの下につけたコルセットの締め具合を気にするふりをした。私はその様子を見ながら別のことを考えていた。

旦那と一度もないというのは眉唾だ。しかし、多分それに近い状態だったに違いない。男の気を惹いてずるずる金を引き出しているうちに発病し仕方なく籍を入れた。彼女ならやりそうなことだった。

「いい加減上手に生きろよ。その状態じゃ他に面倒を見てくれる人もいないだらう。感謝の気持ちでたまにはありがとうの一つも言ってみろ。そうしたら仲良くやっていける」

「嘘でもありがとうって言うの」

「ああ、嘘でも言え」

自称不良少女の美雪は何年経っても昔のままのひねくれ

をするような関係でいることが不愉快だったのだ。

私の気持ちは何度言っても彼女には伝わらなかった。「嫌いな男とは寝ない」というのが美雪の決め科白だった。そう宣言することで好きだという気持ちを伝えていたのかも知れないが、彼女の言葉は当時の私には何の気休めにもならなかった。

十年前、暴力団関係者から金を借りて窮地に陥つた美雪を私は見捨てた。相手が悪すぎて下手に関わるとこちらに累が及びそうだったから、わが身を守るためには逃げるしかなかったのだ。そんなひどい別れ方をしたのに美雪はその後もずっとこちらに電話をしてきた。自分に責任があるという自覚は彼女にもあったのだろう。

意外なことにその美雪が他人の女房になっている。亭主のいる今の彼女には少なくとも金の話を持ち出される気遣いはなさそうだ。後ろめたさよりはむしろほっとした気持ちが強かった。

「ねえ」と、美雪は真顔になってこちらを見た。

「男と女ってセックスなしでもやっていけるかな」

「どうだろう。でもそういう関係も割と普通にあるんじゃないか。大事なものは気持ちを通じ合ってるかどうかだ」

柄にもなくもつもらしい言葉を口に出しながら、私は彼女がなぜそんなことを言い出したのか計りかねていた。

た女だった。重い病氣も彼女の性根を変えることはできなかったらしい。

しばらく彼女の愚痴を聞いてやって腰を上げた。別れ際、美雪はわざわざベッドを下りて玄関まで見送りに出てきた。壁や柱で身を支えながら歩くその姿は明らかにひどく無理をしており、こちらを見つめる表情は心細げで痛々しい感じがした。なぜかそのまま帰ることはできない気がして私は思わず美雪を抱きよせた。そして、まるで壊れ物を扱うように彼女の体を支えながらキスをした。

「また来て」

「ああ……」

深入りするつもりは毛頭なかったがここは頷くしかなかった。セックスができない体と言いなながら彼女のキスは妙に性欲的で、しかも強い薬の匂いがした。

2

最初の訪問の後、一月くらいは美雪に連絡しなかった。かわいそうだとは思ったが、彼女と関わり合うとろくなことにはならないという気持ちがどこかにあったからだ。何度か電話が入っていたが知らぬふりをした。そのうち携帯に入る着信の件数が異常なほど増えてきた。さすがに閉口して電話をかけ、その場で見舞いに行く約束をさせられた。

「今日は調子がいいからどうしても外に出てみたいの」
少々重い気持ちを抱えながら出向くと、こちらの顔を見るなりそう言った。初回は多少しおらしくったが二度目ともなるとすっかり美雪のペースだった。

「外出はもう少し暖かくなってからにしよう。何かあったら旦那に怒られちゃう」

「だって約束したでしょう。着替えるの手伝って」

つきあっていた頃からの馴染みの手口だった。自分で勝手に決めてさっさと実行する。昔からその手で散々振り回された。

美雪は平気な顔でベッドを抜け出し、病人とは思えぬ手際の良さでパジャマを脱ぎ捨てた。ずっと前に別れた女が目の前で下着姿になるのを、私はただ困惑の面持ちでながめていた。一度言い出すと決して気持ちを变えない女だった。過去の経験でそのことをよく知っていたから従うしかなかった。

そこから大騒ぎだった。弱った骨を支えるために美雪はつねにコルセットを身につけていた。普段のものはそれほどでもなかったが、外出用のコルセットはまるで西洋の鎧のような大仰な代物だった。それを何とか装着させた上に女性特有の複雑怪奇な服を何枚も着せて外出の支度を整えるのは、不慣れな私には手に余る作業だった。出入り口の階段を下りマンシヨンの正面に車を移動させて助手席に

座らせるのにさらに一汗かいてようやく車を出した。

前夜、強風が吹いたせいかな春先にしては上々の晴天だった。渋滞する環状七号線を抜けて海岸のほうに車を向けた。美雪を乗せていたから後続車を無視してこれ以上はないほど遅い速度で走った。

「二人で車に乗るのは久しぶりだね」

「そうだな」

「普通に走っても平気だよ」

「ああ」

美雪はこちらの緊張も知らずに平然としていた。気詰まりな自宅療養の生活から一時でも抜け出せたことを素直に楽しんでいるように見えた。

湾岸線の側道を上って江戸川を渡り、大きな十字路の手前で右折レーンに入った。

「本当に元気そうだな」

「うん、この頃調子がいいんだ。夜になるとまだつらいけど。薬がなければね……病気じゃなくて薬で骨が駄目になっちゃったなんて納得できない」

「薬の量、減らして貰えないのか」

「症状が全然治まってないからまだダメだって医者が言うの。当分減らしてくれそうもないよ」

「医者が言うんじゃ仕方ないさ」

「何でこんなことになっちゃったのかな。本当に納得できないよ」

高架線の向こうに広く名前の知られた遊園地が見えていた。駅の周辺は平日にもかかわらず人出が多かった。

「皆歩いているね」

美雪がやや強い口調で言った。声に怒りの気持ちが感じとれた。

「ああ、春休みだからな」

戸惑いながら私は応じた。赤信号で停めた車の前を、遊園地に向かう人波が次々と通り過ぎた。

「口惜しい……」

哀しい響きのつぶやきが漏れた。思わず助手席のほうを見やった。

「外を歩くなんて普通のことだよ。でも、私は転んだら命取りだって医者に言われているからもう一生皆と同じようには歩けない。それが本当に口惜しい」

表情は意外なほど淡々としていたが、声に切実な思いが込められていた。その思いに釣り合った言葉を何とか見出そうとしながら車を走らせた。

「少し元気が出てきたから、それでそんな風に思うんじゃないか。悪いことじゃないよ。病気を治したい気持ちが強くなってきたと考えれば」

「そうなのかな」

「そうだよ。だから……がんばれ」

「うん、がんばる」

美雪の口元に笑みが浮かんだ。やっと切り抜けられたという安堵の気持ちが私を満たしていた。

昔よく二人でお茶を飲んだ海辺のホテルに車を入れた。一階に通路を上手く活かしたティールームがあった。かつて私のお気に入りの場所で、美雪と二人でしばしば午後の怠惰な時間をそこで過ごした。久しぶりにその場所を訪れ中庭に面したテラスに座っていると少し感傷的な気分になった。

「ねえ、今でもビデオレンタルのお店やってるの」

「今は別の商売をしている。競争相手が何軒も出てきて儲からなくなったからさっさと店をたたんだ。借金だけが残ってひどい目に遭った」

「大変だったんだね」

ちよつと聞いてみたというところだったのだろう。美雪は余り気乗りしない様子でうなずいた。そのとき気づいた。最初の訪問からずっと彼女の病気がかりが話題になり、こちらの身辺事情を聞かれたのははじめてだった。そもそも美雪は他人のことに興味を持つタイプの女ではなく、私も失敗した事業を話題にするのは避けたい気持ちだったから会話はそれで途絶えた。

四十歳のとき会社を辞めた。そして、仕事で知り合ったある人物の出資を得て事業を始めた。当時流行のビデオレンタルのチェーン店をつくるつもりで半年足らずの間に三軒の店を出した。ちょうどバブルと呼ばれた時代だったが商売がすぐに軌道に乗るわけもなく、先の見通しがまるで見えない時期だった。

その頃ある酒場で美雪と知り合った。不安を紛らすのに彼女はいわば恰好の女だった。私は美貌よりはむしろ彼女が抱え込んでいる謎の部分に惹かれていた。口下手で自分について多くを語ろうとしないことが、彼女をもっとよく知りたいという欲望を無性にかきたて執着させていたのだ。コーヒーしか飲まなかった美雪が野菜ジュースをオーダーした。それは「がんばる」と口に出した彼女の気持ちと重なっていて不憫に思えた。

「ここへはよく来るの」

「いや、何年ぶりかな。それどころじゃなかったから」

「あの頃楽しかったね。優しくしてくれたんだなって、別れてずっと後になってからそう思ったよ」

出会った頃、美雪は愛人関係にあった男性と別れたばかりだった。別れたというよりお払い箱になったというほうが正確で、手切れ金で呑気に遊び暮らしているように見えたが実のところはひどく荒れていた。商売の不安を抱えた私は、なぜか根拠もなくそんな彼女と同病相憐れむの気分

で度々逢って二人で時間を潰していた。

「あの人、駄目なんだ」

注文した品がテーブルの上に揃うのを待ちかねたように美雪が言った。

「何が」

いきなり核心に入る彼女のいつものスタイルだった。唐突過ぎて、さすがに話の内容を推測することは難しかった。

「セックスができないの」

紅茶に入れた角砂糖をかきまぜる手を思わず止めた。

「あの人って旦那のことか」

「そう」

「いつから」

「ずっと前からだって。何て言ったかな、ちゃんと名前がある病氣」

「EDってやつか」

「ああ、そんなの」

「そうか」

他に反応の仕様がなかった。明るい陽光が満ちあふれる空間で、遊園地帰りの家族連れが目立つ時間帯だった。そんな場所にはまるでそぐわない話題で私は困惑していた。

「最初から知っていたのか」

「うん、だからつきあったんだ。そういう人となら面倒がないでしょう」

「ふーん」

少し話が見えてきた気はした。しかし、まだ彼女がなぜその話題を持ち出したのか分からなかった。

「君だってセックスができないんだろう。病気の君と元々不能の旦那で、ある意味バランスはとれているんじゃないのか。何も問題はないような気がする。とにかく仲良くしろ。それしか道はない」

分別めいた科白を吐きながら、私は胸の裡でこの真相を推測した。

やはり思ったとおりだった。計算づくで今の旦那とつきあったに違いない。不能の男は幾ら金を出させても関係を迫らない。嫌いな男とは寝たくないが金は必要な美雪にとって、それほど都合な男はまずこの世にいない。上手くやったと思って相手を利用しながら海外旅行を楽しんでいるうちに発病した。治療費で男の出費があつという間に膨らんで引つ込みがつかなくなり、相手の望みどおり籍を入れざるを得なくなったのだ。

男が何を考えて彼女のような女と結婚したかったのかは分からなかったが、まずはそんなところだろうと思った。

美雪は澄まし顔で野菜ジュースを啜っていた。ティールームの椅子に背を丸めて座るその姿はどこか不健康に太りすぎた老婆という印象で、かつての均整のとれた筋肉質の

体型を知る私には痛ましく思えた。

「人には色んな出会い方がある。でも、現実に君の世話をしてくれているのは彼だ。それも一つの縁じゃないのか。そのことを素直に受け容れるのが正しいと思うよ」

「受け容れてはいるけど好きにはなれない。どうにもならないでしょう。自分の気持ちはごまかせないもの」

「好きになれなくても感謝くらいはできるだろう。ありがとうって言えばいいんだ」

「好きじゃない人に感謝なんかできない。それより今考えてるんだ。私、独りでやっていけそうな気がする。やっと難病認定も取れたし、独りになれば生活保護も受けられる。認定受けると、ヘルパーさん何度頼んでも無料なんだ。大抵のことはやってくれるから誰もいなくても困らない。そうして何とか独りで暮らして時々あなたが来て話し相手になってくれたらもう十分。この前来たとき言ったでしょう。男と女はセックスなしでも上手くつきあっているって」

「それは何か違うぞ。どうしてそんな風に話が繋がるんだ」
私は思わず大きな声を出していた。まさしく昔のままの彼女だった。自分勝手に先の見通しがなく、そのときの気分だけで動く女……それが美雪だった。

「そうだ、二人で温泉行こうよ」

こちらの思いには構わず美雪はいきなり無茶な提案を持ち出した。

「病気って気持ちが大切でしょう。あの家で気詰まりに暮らしていたら治るものも治らない。お湯に入つてのんびりしたら少しは体にいいと思う。だから一緒に温泉行こう」
 「そんなことできるわけないだろう。幾ら病気でもセックスができなくても、君は人の奥さんだぞ」
 「あら、あなたも奥さんがいるでしょう。それなのに私と何年もつきあった。いつからそんなに立派な人になったの」
 「あの頃とは事情が違う」

妻とは事業に失敗した直後離婚していた。今は子供達と一緒に実家で暮らしている。しかし、その話は美雪にはしないでおこうと思った。

「私がセックスができない女だからそれで一緒に行けないの」

「そうじゃない。おれはそこまで悪党になれないだけだ」

「悪いことなんかしない。私には介助してくれる人が必要だからあなたと二人で温泉に行く。それでどうして悪党になるの」

「介助が必要なら旦那と行くのが筋だ」

「旦那は出不精で相手にしてくれない。それにあの人と行つても全然気晴らしにならないもの」

「そういうことじゃないだろう。いくらおれがろくでなしでも君のことを本気で大事にしている旦那は裏切れないよ」

さすがにそれ以上は追及せず美雪は口をつぐんだ。つきあっている女などいるはずもなかった。私の周りにはいささか手間の掛かる病気の女が一人いるだけだ。

3

ドアを開けると美雪はエプロンをつけてキッチンに立っていた。そんな姿は二度と見ることはないと思っていたから少し驚いた。

「どうした」

「何だか顔が見たくて」

「そうか」

朝、彼女から電話があった。どうしても今日中に逢いたいと言った。彼女特有のわがままだったが私には拒否することができなかった。

最初、美雪に深く関わることはしないでおこうと思っていた。しかし、五ヶ月経った今では月に一度や二度は必ず彼女の家を訪れる生活を続けている。不思議な感じがした。どこかで自分の気持ちが変化したのだろうか。変心のきっかけについて思い当たるところはなかったが、そのプロセスには興味があったからあらためて考えてみた。

美雪の気持ちは容易に推測がついた。彼女は明らかに私という男に心理的に依存しきっているのだ。親身に世話を

「どうして」

昔の悪い夢が甦った気がした。普段は口数が少なくこちらが知りたいことの十分の一も話さないくせに、何かをねだる場面になると俄然饒舌になる彼女だった。その手口には昔も度々泣かされた。美雪はどんな場合でも相手を追いつめる女だとあらためて思った。

「ねえ、久しぶりにラブホテル行こうか。あなたとならセックスできるかも」

本気が冗談かは分からなかったが、美雪はさらにとんでもないことを言う。セックスができないという彼女の話は本当は嘘っぱちかも知れない……ふと、そんなことを考えた。

「杖ついて歩いている女とホテルに入るのなんておれはいやだね」

撥ねつけると彼女は真顔になってしばらく黙り込んだ。

「今、誰かつきあってる女はいいるの」

ふいに美雪が聞いた。どこか思いつめた表情だった。

「誰も」と、私は即座に答えた。

「店を潰したおかげで、ついこの間まで夜逃げと自己破産のどちらを選ぶか真剣に考える状態だったんだ。おれはこれから一文無しで還暦を迎えようという情けない男だ。女なんかいるわけないだろう」

「そう……」

してくれる旦那をどうしても受け容れることができず苦しんでいたときに、タイミングよく昔の男である私が出現した。行き場を見出せずに迷走していた彼女の気持ちがなだれ込むようにこちらに向かったのだろう。

他方、私にとって美雪は何の得もない女だった。病気のためにかつての美貌は失われセックスさえできない体になつていく昔の女。彼女はただそれだけの存在に過ぎなかった。ところが、私はそんな彼女からなぜか離れられずにいた。特別な感情はないと断言できた。憐憫、同情、あるいは昔の誼み。様々な言葉が頭に浮かんでくるがどれも違う気がする。それとも私は自分に依存してくる者に逆に依存してしまうタイプの男なのだろうか。おのれの過去をふり返ってみてそれも有り得る回答に思えたが、本当のところは自分の気持ちがよく分からなかった。

ただ、奇妙な好奇心のようなものは感じていた。このまま彼女との関わりを続けていてどんな風な結末を迎えるのか。それを見てみたいという気持ちがどこかにあった。かつて私は昆虫の生態を観察して克明にノートをつくるような子供だった。何の感情移入もない冷たい観察眼……私が美雪を見る目にはそれに近いものが確かにあった。

居間のソファに腰をおろして上着を脱いだ。季節はずつかり夏になっており、暑がりの美雪らしく部屋のなかは強いエアコンの冷気で寒いほどだった。

「台所に立ったりして平気なのか」

「旦那は自分がやるって言うけど、あちこち汚くするからいやなの。調子がいいからこの頃は私がやってる」

「調子がいいのは何よりだけど、あまり無理はするな」

「私、何だか元気が出てきたみたい。あなたが来てくれるからかな。春からどんどん良くなってる気がする」

そう言いながら美雪はこちらをふり返った。いつになく明るい表情だった。

テーブルにコーヒークップを置いて美雪は私の隣に腰をおろした。エプロンを外した彼女は黒のショートパンツと蛍光色の黄色いTシャツを着ていた。しかし、そんな病人らしからぬ姿の彼女からはやはり強い薬の匂いがした。

顔のはれは相変わらずだったが体は少し痩せた感じがした。もつとも、そのせいで首筋や腕に肉のたるみが目立ってまるで老人のようで、私より六歳も下の女には到底見えなかった。最初見たときより確かに身のこなしは滑らかになっていた。快方に向かっているのか、それともただコルセットに慣れただけなのかは分からなかった。

「携帯電話が欲しくて」と、美雪はいつものとおりに前置き抜きで話し始めた。

「薬のせいで骨も筋肉も弱っているでしょう。私、長い時間受話器を持ってられないんだ。携帯電話なら軽いし、

はないだろう。黙っていても嘘をついたことにはならないさ」

「黙ってるのは嫌いだもの。それで正直に話したらすごく怒ってるの。病気の女の家はどうして何度も来るんだろうって。変な話でしょう。病気だから来てくれてるのに。」

つまり、そういうことが分からない人なんだ。携帯電話を持たせると私があなたにばかり電話すると思ってるみたい。気の小さい男だから」

美雪は口を尖らせて自分の夫を非難した。昔もよく金を借りた男たちのことをそんな風に悪く言った。彼女のひねくれた根性はやはり死ぬまで変わらならしい。

「携帯のことはまた頼んでみるつもり。何度も言えばそのうちうんざりして買ってくれると思うから」

「まあ、ほどほどにしておけ。旦那にも色々考えがあるんだろう」

「それより温泉行こうよ。私、本当につらいんだ。一日中ほとんどベッドの上にいるんだよ。夜になるとあの人と顔つき合わせて退屈なだけ。気晴らしする場所がどこにもないんだもの」

大きく溜息をついて美雪はこちらに顔を向けた。涙目になっていた。その気持ちは真実だと思えたから即座に撥ねつけることはできなかった。

「旦那にどう説明するつもりだ。昔のカレシと温泉に行き

それにメールも打てるからいいと思って。それで旦那に買ってくれて頼んだら駄目だった」

「どうして駄目なんだ」

「あなたのこと妬いてるの」

「妬いてる」

思わず声をあげた。全く予想もしていない言葉だった。

「おれのこと旦那に話したのか」

「何度も見舞いに来てくれていたことは話してある。私、

隠し事は嫌いだもの」

「夫婦の間では、おれと君はどんな関係の人間になっているんだ」

「昔のカレシだって言ってる。大体のいきさつは話した。都合の悪いところは少し伏せておいたけど」

美雪は真顔になってこちらを見た。平気な顔を装っていたが、困惑するこちらの様子を明らかに楽しんでた。

「それはまずいだろう」と、私はコーヒを一息で飲み干して嘆息した。

「どうしてまずいの」

「どうしてって。世のなかには黙っていたほうがいいこともあるんだ。君とおれとの関係はその手の話だ。旦那が聞いて面白いはずはないだろう」

「でも話しちゃった」

「もう昔のことなのにどうして話すんだ。旦那が知る必要

ますって言うのか。君なら言いそうだから、おれはそれが怖い」

「そこまでバカじゃないよ。女友達とでも行くって言う」

「どうだか。まあ、考えてみるよ」

「本当に考えてくれる」

「ああ」

「そうだ。ちょっとお酒でも飲む」

彼女は一人でうなずいて、キッチンから缶ビールを一本持ってきた。咽喉が渴いていたからほとんど一息で飲んだ。そして、わずかに残った一口を美雪が無造作に飲み干した。それは潔癖症の彼女が以前なら決してやらなかったふるまいだった。それほど気分がよくなったのだろう。彼女は私の言葉を肯定的に受け取って、すっかり温泉に行く気になっている。しかし、こちらにはそんなつもりはまるでなかった。どう始末をつければ美雪を納得させて丸く収めることができるのか……そのことばかりを考えた。

ドアを開けると彼女は前回同様キッチンで何やら立ち働いていた。ショッピングセンターにある映画館に二人で行ったとき、帰りに買ってやったピンクの地に白いレースのフリルがやたらついたバジヤマを着ていた。居間に入ると

例によってエアコンはフル回転で部屋のなかは隅々まで冷え切っている。

室内に充滿した硬質の冷気はさすがに我慢できず、それを和らげるつもりでベランダに面した引き戸を開けた。石油と生き物の腐敗臭が入り交じったような都会の川特有の臭いが流れ込んできた。しかし、肝腎の川面はその場所からは見えなかった。ベランダの数メートル先に頑丈なコンクリートの護岸がそびえ立ち視界を遮っているからだ。

その様子が何か美雪の生き様を象徴しているような気がした。いつも最悪の選択をしてどれだけ歩いても目の前に壁が立ちほだかり先が見えない……それがこれまで美雪が歩いてきた道だった。もつとも、破産状態で家族も失った今の自分が置かれている立場も彼女と大して変わらず、ここまできてようやく本当に同病相憐れむの關係になったのかも知れない……そう考えて胸の裡で苦笑した。

「本当に平気なのか」

元氣そうに見えたがやはり氣になった。

「わざわざ来てくれるんだから少しはおもてなしの真似事くらいしないとね」

「氣にするな。君は病人なんだ。おれは病氣の人に世話を焼いて貰うつもりはない」

「普通のことかしたかったの。そうすると気持ちが悪く着くんだ。ああ、私も皆と同じようにできるんだなって。今はそ

れが嬉しい」

「気持ちには分かるが、無理はしないほうがいい」

「平気。それよりお料理部屋に運んで。作るのは大丈夫だけど、持ち運びは力が出ないから苦手」

美雪がつくった幾皿かの手料理をキッチンから居間のテーブルに運んだ。以前の彼女は外見上はおよそ実用的に見えるなかったが、そのくせ料理や掃除などの日常的な家事を意外に上手にこなす一面を持っていた。

「病氣になっても手際は相変わらずいいな」

賑やかなになったテーブルを見ながら私は思わず口に出した。ビデオレンタル店の開店直後に都内に借りた仮住まいのアパートを何度か訪れて、ありあわせの材料で氣の利いた料理を用意してくれた。そのときのことを思い出した。

「こんなの普通だよ。私だって離婚する前は何年も主婦やつたんだから」

美雪は二十歳で結婚して子供を二人産んでいた。十年で離婚して子供を夫のもとに置いたまま東京に戻り、水商売を転々とした後に下町で輸入雑貨を扱っていた男の愛人になった。私が彼女と出会ったのはさらにその後だった。

「ねえ、今日は本式にお酒飲もうよ」と、美雪はサイドボードに歩みより、ガラス戸を開けながら言った。

「イタリアへ旅行したとき、めずらしいお酒を何本も買い込んだの。旦那は飲まないからほとんど残ってる。あなた

はお酒好きだから飲んで」

「おれは車だからな」

「大丈夫だよ。酔いが覚めてから帰れば」

「旦那が帰ってくるだろう」

「旦那は仕事の後パチンコだから閉店まで帰らない。その前に帰れば平気」

「そうか」

彼女は妙に強引だった。しかし、そこまで言われると元来酒に節操のない私にはもう断る理由がなかった。

料理に箸をつけながら美雪がイタリアで買ったという山羊の乳で造ったリキユールを黙々と飲んだ。氣分は悪くなかった。強い酒の力なのかぼんやりした高揚感が身内に萌もしていた。ソファの片方の隅で美雪が少し照れたような笑顔をこちらに向けた。

「今、すごく楽しい」と、彼女は屈託なげに言った。

「あの頃、こんなこともっとやったら、私たち別れないで済んだのかな」

それは違うだろうと内心思った。しかし、自分の気持ちを口に出して言うつもりはなかった。グラスに酒を注ぎながら美雪のほうは見ないで言った。

「色んなことがあったから。それよりこれおいしいな。おれ、こういうの好きだ」

小さなイワシを唐揚げにして南蛮漬け風に仕立てた料理が

あった。それを箸でつまみながらグズグズととりとめもない話を続けた。

「おれ、何だか眠くなってきた」

にわかに酔いが全身に巡るのを感じた。山羊の酒はやはり私には強すぎた。腰が抜けるような酔い方をしたのは久しぶりだった。

「ベッドで寝てもいいよ」

「ああ……」

美雪の声を虚ろに聞きながら宙に浮く氣分で立ち上がった。それから何も考えずベッドに体を投げ出した。

腕に柔らかな感触を感じてふと目が覚めた。あたりはすっかり闇に包まれて夜になっているのは分かったが、しばらくの間自分が今どこにいるのか判断がつかなかった。数分かけて正氣を取り戻し、そこが美雪のベッドのなかであることを思い出した。薄いタオルケットのような夜具に包まれていたが、ひどく暑くて汗ばんだワイシャツが下着に貼りつく感じが不快だった。

首をひねると目を閉じた美雪の顔が間近にあった。明らかに寝たふりをしていた。ずっと以前に慣れ親しんだ女の体臭を強く感じた。そのとき初めて気づいた。驚いたことに彼女は素裸だった。私は介護ベッドのなかで裸の美雪を横抱きにするようにして寝ていたのだ。思いがけず目にし

たその現実離れた光景が眠っていた男の欲望を甦らせた。

頭のなかではまずいことをしているという自覚は確かにあった。しかし、手のほうは美雪を快楽に導く手順を忠実に実行していた。固くなった両の乳首を交互にゆっくりく愛撫してから下腹部に手を這わせ濡れたその部分をひとしきりまさぐると、やがて美雪は小さく喘いで全身を震わせた。

タオルケットのなかに血と葉の臭気が入り交じった女の匂いが満ち溢れた。さすがにそこから先の行為に及ぶ気持ちにはなれなかった。強く抱かれると骨が折れて死んでしまふという言葉も頭にあつたが、彼女の体臭がなぜか外を流れる川の臭気を思い起こさせて急速に欲望が萎えていくのを感じたからだ。

「いや、酔っちゃまった」

彼女を抱きながら思わず意味のない言葉を口に出していた。

「すごく気持ちよかった」

美雪は薄目を開けてつぶやいた。病人特有の刺々しさが消えて優しい顔になっていた。その優しさは遠い昔の危険な記憶に繋がっていた。

「君の寝床を占領して悪かったな」

「ここに寝たの、あなたが最初の男だよ。旦那だって一度も寝かせてない」

そこでようやく鈍い頭が反応し美雪に亭主がいることを

い声だった。

「そうです。鬼嶋です」

駐車場に設置された常夜灯の照明で相手の姿がはっきりと見えた。真夏だというのに濃紺のスーツをきっちり着こなした痩せ形の男で茶色の手提鞆を持っていた。整った顔立ちで薄い口ひげを蓄えており、その表情から几帳面で神経質な人物のように思えた。

「そうです。私が鬼嶋です」

そのときには相手が誰かもう分かっていたから、身構える気持ちになつてもう一度同じ言葉を繰り返した。

「多分そうだと思つて声を掛けました。私は美雪の夫です。あれが大変お世話になつているようでありがとうございませす」

「いえ、こちらこそ」

丁寧な挨拶だったが先刻の情景を思い浮かべると返事のしようがなかった。私はすっかり混乱していた。

「遅くなつてからお邪魔したものですからこんな時間になりました。申し訳ありません」

思はず嘘をついた。女一人の家に半日も居続けたとはさすがに言えなかった。美雪の夫は少し笑つて首を横に振つた。

「それはかまわないんです。美雪は自由に外出もできない体で退屈しきっていますから、話し相手になつていただい

思いました。

「遅くなつた。もう帰る」

それだけ言つて弾けるようにベッドを抜け出し、上着を抱えて後もふり返らずに玄関に向かった。そのときにはさすがに気づいていた。いかにも美雪らしい見え透いた手口に上手く嵌められたのだ。

おのれの愚かしさを悔いながら急ぎ足でマンションを出た。気分は最悪だった。夜闇のなかにまだ昼間の熱気が残り、生暖かく湿つた外気が沈んだ気持ち余計に落ち込ませた。車に戻りルームライトの明かりで時間を確かめた。九時を少し過ぎていた。おそらく五時間は眠っていたはずなのに悪性の疲れが肩と腰に重くのしかかっていた。

キーを差し込んでエンジンを始動させたとき、前方から人が歩いてくるのに気づいた。おそらくマンションの住人だろう。表通りの街灯が唯一の明かりで細部はよく見えなかったが、スーツ姿の男であることは分かった。

男はしっかりと足取りでこちらに近づいてきていきなり車に歩み寄つた。そして、車内をのぞき込むように身かがめて運転席の窓を軽く叩いた。

「失礼ですが鬼嶋さんですか」

ゆつくりとした口調で男が聞いた。ややかすれ気味の低

て感謝しています」

「そうですか」

「ただ」と言いかけて相手はためらう表情になった。

「あなたが来られるようになってからあれが妙に落ち着かなくなりました。反抗的になつて私の言うことを聞いてくれません。本当のところ美雪はいつ死んでもおかしくない重病人です。しっかりと養生しないとまずいです」

相手は嘆息して私の顔を見つめた。その目に軽い敵意のようなものが感じられた。

「だから……もうここへは来ないでくれませんか。あなたがいらつしやると気が散つて、あれが治療に専念できなくなりませす」

おそらく他人と争うことができないような心の優しい人物なのだろう。言いたいことを言い切つたせいか美雪の夫は安堵した表情になった。なぜか「不能」という言葉が頭に浮かんだ。

「おつしやるとおりです。もうここへは来ないようにします」

他に答えようがなかった。私は投げやりに一礼して車を出した。ベッドのなかの美雪はもうパジャマを着ただろうかとそのことだけを案じていた。

三日後の早朝、美雪から電話が入った。知らぬ顔をして
いるとほとんど三分おきに着信音が鳴って止まる様子がな
い。たまりかねて電話に出るといきなり刺のある口調で切
り出された。

「ねえ、いつになったら温泉に連れてってくれるの」

ひどく苛立っていた。何かトラブルがあったことは容易
に推測がついた。

「少し待ってこの前言っただろう」

不可解だった。美雪は私と旦那が話したことを知らない
のだろうか。言い争いは避けたい気持ちだったから、この
まま放っておいて自然に彼女との関わりを絶つつもりでい
た。しかし、その目算はどうやら外れたようだ。

美雪は叫ぶような声で続けた。

「少し待っていつまで待てばいいの。とにかく、これからタ
クシーでこちらに行くからホテル予約しておいて。近くま
で行ったらまた電話する」

「急に言われても無理だよ。こちらにも都合つてものがある
んだ。そこからタクシーでどれくらい金が掛かると思っ
てるんだ。そんな金はないぞ」

最悪の展開だった。困惑する私に美雪は追い討ちをかけ
るように無理難題をふっかけてきた。事業に失敗した後、
私は千葉県の東の外れにある町に引越していた。岬の先

んでしよう。前にもそんなことがあったからそのうち帰っ
てくるよ。他に行く場所なんかないんだから」

「絶対にそこから動くな。これからおれがこちらに行く」

「温泉連れてってくれるの」

「その話は着いてからだ」

何とか美雪を宥めて普段着のまま家を飛び出した。仕事
の予定も入っていたがそれぞれではなかった。車を走ら
せながらことを収める方法を考えた。実のところ解決法は
一つしかなかった。それが分かっているながら彼女の家にぐ
ずぐず通いつづけた愚かさがこの結果を招いたのだ。おの
れを悔いながらひたすら先を急いだ。

居間に入ると美雪は最初訪れたときと同じように介護ベ
ットに足を投げ出してこちらを見上げていた。どういうつ
もりなのか下着が透けて見える紫色のキャミソールを着て
いた。派手な衣装とは裏腹に恐ろしく硬い表情だった。

「何だか変なの」

訴える口調で言つて美雪は腰に手をあてた。

「腰が痛いのか」

「そう。こうしているとそれほどでもないけど立つとひどく
痛む。あんな気持ちいいことしたのがいけなかったのかな」

「刺激が強すぎたのかも知れないな」

私はベッドには近づかず少し離れた場所にあるソファ一

端にちょっとした温泉地があるという話を、何かの話の折
りについてすっかり彼女にしたことがあった。これからそこ
へ来るといふのだ。いくらタクシーを使つても二時間以上
の旅を彼女が一人でできるわけもなかった。しかし、そん
な無茶を平気するのが美雪という女だった。何としても
思いとどまらせようと思った。

「一体どうしたんだ。今日は日曜日だろう。旦那は家にい
ないのか」

「いないよ。あの晩出てったきり帰ってこない」

「それじゃ尚更だろう。旦那の留守に出掛けたりしたら大
騒ぎになるぞ。ともかく今日はやめろ」

「だって約束でしょう。待ってずっと言ってるけど、い
つまで待たせるつもり」

「あんな……」

わが身の愚かさを改めて思い知らされた。自分の本当の
気持ち伝えずに曖昧な態度に終始したツケが一時に押し
寄せてきたのだ。気を許すとわがままを言い張り、こちら
を抜き差ししない状況に追い込むのが彼女の流儀だっ
た。何度もそれでひどい目に遭つたのにまた同じことを繰
り返していた。

「旦那と喧嘩したのか」

「帰ってきてすぐ怒つてた。いやなら出ていけって言っ
てやつたら出ていった。どこかのホテルにでも泊まってる

に腰を下ろした。

「旦那はまだ帰らないのか」

「帰らない」

「それはまずいな」

「まずかないよ。どうせ明日あたり帰ってくるから。あの
人、身寄りが一人もないから私に葬式出して欲しいんだ
つて。だから必ず帰ってくるよ」

強気の言葉を口に出したが、彼女の表情はどこか心細げ
だった。

変な話だと思った。旦那は重い病気の美雪より先に死ぬ
つもりでいるのだろうか。あるいはそのつもりでいたのに
予想外の病気であてがはずれたのか。もっとも、これだけ
根性がねじ曲がっていれば美雪のほうは当分死ぬ気遣いは
なさそうだ。案外、旦那の願いは叶うのかも知れない……
そう考えると少しおかしかった。

「たまには脅かしてやらないと」

美雪は吐き捨てるように言った。

「脅かすって、どういうことだ」

「シヨック療法つてあるでしょう。ときどきビククリさせ
てやらないと私のこと全然かまってくれないから」

「何だよ、それ」

ふざけた言葉に無性に腹が立った。そこでようやく美雪
の魂胆に気づいた。彼女には旦那と別れる気など全くなか

つたに違いない。おそらく私と旦那を両天秤に掛けて双方の気を惹こうとしていただけだったのだろう。怒りの気持ちは持続していたがそれを口に出すことはしなかった。

「あの晩、旦那の顔見たよ。いい男じゃないか」

「あっちもあなたの顔見たって言ってた。私に怒るんならあなたにじかに文句言えばいいのにそれは怖くてできないんだ。そういうところが大嫌い」

「いや、旦那と話したよ。知らなかったのか」

「本当に……何て言ってた」

「もうここへは来ないでくれて言われた」

「そんなこと何も言ってなかった。そういう陰険なところが大嫌い」

彼女の言い分はいちいち癪に障ったが、病人相手に本気で腹を立てるのも大人げない気がした。彼女は自分のなかの残り少ない「女」を精一杯吐き出して、おのれの危うい生を何とか確かめようとしているのだ。そう考えるとやはりかわいそうな女だった。しかし、彼女をそこまで窮地に追い込んだのも彼女が持つ過剰すぎる「女」に他ならなかった。おそらく美雪は死ぬまでそのことに気づかないのだろう。

「それでどうするの。温泉連れてってくれるの」

詰問するような強い語調だった。長居するつもりはなか

しかし、私の気持ちはもう決まっていた。

「とにかく君のパートナーはおれじゃなくあの旦那だ。おれは二度とここへは来ない。これでお別れだ」

それだけ言ってソファから腰を上げ玄関に足を向けた。美雪は半ば放心したような表情でこちらを見上げていた。

「私を棄てるつもり」

その声を背に受けてドアノブに手を掛けた。

「また私を棄てるつもり」

繰り返すその言葉が私の肺腑を貫いた。美雪はずっと以前から自分が病人扱いされることにうんざりし反発していたのだ。彼女は私との再会をきっかけに反発の気持ちは「女」であることよって示そうとした。しかも、その気持ちはさらにかき立てたのは、彼女を病人扱いした人間の一人である私自身がまだ内部に抱いていた「男」だった。おそらく病気の彼女を甘く見過ぎていたのだろう。優しい昔なじみを演じながら、私は彼女が持つ「女」の残滓を敏感に嗅ぎ分け不遜にも弄んでいたのだ。彼女の言葉にそのことを思い知らされた。

走り出す前に見納めのつもりでもう一度マンションのほうをふり返ったとき、意外な光景を目にして思わず息を呑んだ……出入り口に杖をついた美雪の姿があった。彼女は危なげな足取りで階段の手前まで歩み寄り、こちらに向か

つたがその話だけはしておく必要があった。

「温泉は行かない。ここへ来るのも今日でおしまいだ」

「どうして。あの人に言われたから……」

美雪はそう震える声で言っただけで絶句した。ひどく情けない顔をしていたが、もうその表情に心を動かされることはなかった。

「いや、前からそう思っていたんだ。だけど君が楽しそうだったからどうしても言い出せなかった。君にはあの色男の旦那が必要だ。おれには代わりはできない。だから、ここへ来るのもこれで最後にしようと思う」

「また、私をひとりぼっちにするつもり。春先にお見舞いに来てくれたとき、本当に嬉しかったんだよ」

「おれに考えが足りなかった。病氣と闘っている夫婦の間にしゃしゃり出て君の気持ちをかき乱してしまった。悪かったと思ってる」

「私、あなたにひどい迷惑を掛けた。それが分かっていたから別れた後もずっとあなたのことが好きだった。確かに旦那には世話になった。だけど、あの人もあなたの代わりはできない。もうわがままは言わないからこれからもここへ来て。温泉も行かなくていいからここへ来て」

美雪は涙目になつて私を引き留める言葉を繰り返した。

その気持ちに偽りのないことは彼女の様子を見てよく分かった。

って何か一声叫んだ。そして、いきなり上半身を前後に大きく揺らして崩れ落ちるようにコンクリートの床に倒れ伏した。部屋着の上に灰色のガウンをまとった美雪は横たわったまま身動き一つせず、その姿がなぜか折り畳んだように小さく感じられた……まるで映画の一場面のような遠い光景に思えたが、それは紛れもなく目の前で現実起こった出来事だった。「転んだら命取り」という彼女の言葉が頭のなかを駆け巡った。

やがて数人の男女が駆け寄ってきて彼女を取り囲んだ。そのうちの一人が携帯電話を取り出して救急車を呼んでいる様子だった。そこまで見届けて車を出した。美雪は「女」をやり通して壊れたのだと、私は強いてそう思い込もうとした。しかし、頭のなかでは何か物が爆ぜるような音がしきりに聞こえ、その音が遠くから聞こえてくる救急車の警告音と共鳴して乱れた心を強く震わせた。哀しくはなかった。ただ、渴いた気分がした。

前回の第七回銀華文学賞で思いがけなく優秀賞に選ばれました。表彰式で賞状とメダルを頂戴したとき、いつかの場所で一等賞を授与されたいと強く願いました。

とはいえ、応募者のレベルが高いこの賞で願いが容易く実現するとは夢にも思いませんでした。ところが今回、意外にも私の作品が当選作に選ばれ、喜びとともに非常に驚きを抱いています。

三十歳で一度創作活動を放棄し、以後二十年間文学とは無縁の生活を送りました。五十歳のときなぜか無性に小説を書きたい気持ちに駆られ、再び拙い創作活動をするようになりました。そのとき、私の胸の裡では「小説なんか書いていいのかわ」という声がいつも聞こえていました。当時の生活がそれほど逼迫していたからです。

病を得たとき、これで小説を書かなくて済むという安堵の気持ちはどこかにありました。それでも私は書くことをやめず、その理由を考えているうちにようやく覚悟が定まりました。そして、前回賞をいただいたとき、声は「小説を書け」に変わっていました。

昨年の春、私の住む千葉県旭市は震度六弱の激しい揺れと、直後海岸を何度も襲った大津波で甚大な被害を受けました。辛くも倒壊を免れたわが家はすべての家財が室内に山積し、作品のデータを収めたパソコンはその下に埋もれ

て所在さえ分かりませんでした。しかし、二週間後何とか救出したパソコンのなかでデータは奇跡的に生きていました。

いわば作者とともにあの震災を生き伸びたこの作品が価値ある賞を得たことに、今私は深い感慨を覚えています。少なくとも一年間は喜び楽しむことを控えたいという思いがあります。しかし、本音のところはやはり嬉しい気持ち一杯で、「小説を書け」という内部の声はいよいよ強くなっています。

私の拙い創作活動を評価し励ましていただいたすべての皆様に、感謝の気持ちを捧げます。ありがとうございました。



冨場 渉

- さえば わたる
1948 大阪府守口市生まれ
70 早稲田大学政経学部を卒業
91 サラリーマン生活をを経てコンビニエンスストア自営
2000 コンビニ店廃業、現在調査会社契約社員
03 『コバルトアワー』で千葉日報「千葉文学賞」受賞
08 「文芸思潮」20号に『甲虫の家』を発表
09 「文芸思潮」26号に『決別の川』（原題「哀愁のティラノ」）を発表
11 『骨肉の町』で第7回銀華文学賞優秀賞受賞

文芸思潮臨時増刊号

エッセイ宇宙
6

THE ESSAY COSMOS

第7回「文芸思潮」エッセイ賞作品集

第7回エッセイ賞の作品を集めた豊かなエッセイ集

エッセイ宇宙が豊かに広がります

アジア文化社

1000円（税込）

ご注文はアジア文化社まで

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

デスペラード

牧港誠之

「吉竹企業」から「港南運輸」に派遣された下請け作業員の佐々木亨の前歴について、彼と同僚の作業員たちのなかには、野毛を縄張りとする暴力団の構成員だった、と言う者もいたし、福富町の怪しげな飲み屋でバーテンダー兼用心棒をやっていた、と言う者もいた。元神奈川県警のお巡りだった、と言ったのは、下請けで一番年長の柳井だった。柳井は簡易宿泊所が集まるドヤ街に住んでいるが、その多くの住人のようにノミヤで競馬、競輪に手を出したりパチンコにうつつを抜かしたりすることもなく、金をしつかり溜め込んでいるという噂の、温厚な顔をした五十過ぎの男だ。かつてはしゃぶ覚醒剤の密売人をやっていたという

かの今日のこの日に横浜のこの現場で誰にも文句を言わせねえで一丁前に働いているってことさ……」

ラグビー選手のとぎのことは佐々木が何度かおれに喋ったことがあり、横浜の金沢区にある私立高校ラグビー部の右プロップとしてインターハイで県の決勝まで進んだことは、確かだろう。

「スクラム組んでいてレフリーの見えないところで腹の蹴り合いをしたもんだ。それで腹筋だけはボクサー並みに鍛えたよ……」などと言ったのだった。

ともあれ佐々木は下請けの五人の作業員の一人として、大手船会社が埠頭公園の敷地を借りて運営している本牧埠頭のこのCFS（コンテナ小口貨物集積所）に常駐し、八時半から五時半まで輸出入貨物をコンテナに入れ出ししたり、無蓋コンテナに載せた重量貨物の繫牽作業をしたりしている。垣花とともに昨年十一月から始めてこの一月で三ヶ月目になる。身長百八十センチを超え、腕脚の長い、多分ラグビー選手時代と大して変わらない筋肉質の、港湾作業員としては申し分のない身体をしている。月曜から土曜まで休むこともなく、惜しみなく筋肉を動かして、下請けや職安で拾われてやってきたその日限りの作業員たちを見続けたおれの眼には、飛び抜けた男に見えた。まさかコンテナの天井が落ちてくるわけでもねえだろう、と言

ことで、街の裏事情に長けている彼の話には何となく信憑性があり、県警のどこの署に勤めていたんですか？とおれが聞くと、見たことはないが、そのような噂を耳に挟んだことがある、と柳井は言った。ドヤ街の一泊三千五百円する部屋を一ヶ月前払いで借りて佐々木と一緒に住んでいる垣花に聞くと、口止めされているのか、はぐらかすような笑いを見せただけだった。何をやっていたんだい？とおれが気軽な口振りで本人に直接聞いたことがあったが、どうでもいいじゃないか、昔のことなんか、と佐々木は言った。

一問題なのは、北からの冷たい潮風が吹き抜ける冬のさなでコンテナの内では、下請け作業員用に支給された茶色のヘルメットを被らなかつたが、おれはそんなことで佐々木に文句を言う気にはならなかつた。

佐々木の働き振りが、何かと楽することばかり考えていやがるうちの若い連中よりも陰日なたく働く、鍛えれば楽しみな存在だ、とCFS作業の組を指揮する組長の鎗田に認められ、うちに入らないか？と誘われた。下請け作業員としては異例のことだった。色々控除されるので最初のうちは月々の手取りは目立って多くはならないだろうが、夏と冬に基本給の二、三ヶ月分のボーナスが貰えるし、年収で考えれば「港南運輸」に入る方が格段に良くなる。二年以上働けば在籍した年数に応じて退職金だって出るし、もちろん社会保険だって揃っている。

だが、佐々木は鎗田から持ち込まれた話を即座に断った。何故断つたんだい？とおれが聞くと、港の景気が悪くなればおれたちが真っ先に誠になるのは判っている、と佐々木は言った。

「このボットムの仕事、我が身を削り取って売っているよなものだ。そんなことは百も承知だ。だがな、ここには古い連中がのさばってやがるし、それによ、三ヶ月先も同じところにいるかと思うとゾツとするときがあるんだ」佐々木は嘲るような笑いを浮かべて続けた。傍らにいた垣花がにやついた笑いを浮かべた。本人がそう言っているの

だから、春になれば佐々木はもういないだろう、とおれは思っていた。

ところでおれは、得意先回りの営業や団体旅行の添乗員をやっていた関内の小さな旅行会社を辞め、二十九の歳で、仕事さえきちんとやれば他人に頭を下げたりする必要がない港湾作業の現場に勤め始めて三年と二ヶ月になる。

このCFSでクリーム色に黒い横線が一本入った正作業員用のヘルメットを被ってフォークリフトを運転し、荷受けやコンテナ作業に従事している。

カートンやバッグなど、数が多い小口貨物をコンテナに詰め出しする場合、フォークリフト運転手のなかには、パレットに載せた貨物をコンテナに運ぶと、吹きっ晒しの運転席に座って荷役作業を見守るだけで意地を張っているかのように筋肉労働には手を出さない者もいるが、おれはじっと座っているのが焦れつたくなつて運転席から飛び降り、下請けたちに混ざつて身体のうち燃焼しきれないものを燃やす。特に世代が同じ佐々木や垣花が働いているコンテナでは彼らとともに貨物を運んで筋肉に弾みをつけ、どうでもいいことを声高に喋くつて気を発散させる。

晴れ上がって風が殆んどない、一月中旬の木曜日だった。豪州向けの二十フィート・コンテナ十五本への詰めが予定されていた。二口でやれば定時までには充分に間に合う、このCFSでは特に忙しくも暇でもない一日だ。下請

けの作業員が三十代の佐々木と垣花の二人と、四十代、五十代の柳井と更科の三人の二手に分かれてコンテナに入り、それぞれのコンテナに佐原とおれがフォークリフトで貨物を運ぶ。おれは希望して佐々木と垣花がいるコンテナを受け持った。午前中に四本のコンテナにシドニーとブリスベン向けの貨物を詰め、午後一番の作業でおれは、アデレード向けの工作機械が梱包された木箱をドライ・コンテナの奥に置き、佐々木たちが航海中に船が荒天に遭つても動かないように床に角材を打ち付けて木箱を固定し、それから木箱の横と上の空いた空間にビデオデッキが入った白いカートンを天井まで隙間なく詰めていた。パレットを木箱の前に置くと、フォークリフトのエンジンを切つておれも作業を手伝った。

クリーム色のヘルメットに黒い線が三本入った副組長の浜中に対して佐々木が熱り立ったのは、佐々木が浜中に直接怒鳴られたり小言を言われたりしたわけではなかった。隣のドライ・コンテナでシドニー向けのボールペンが入った緑色のカートンを詰め込む作業をしていた更科がヘルメットを脱いでコンテナの床にしゃがみ込んでいたのを通りかかった浜中が見咎め、いきなり罵声を浴びせたからだつた。

「おいおい、お父さん、みんな一生懸命働いているのに、よ、ひとりお座りしちゃつて」

浜中の甲高い怒鳴り声はコンテナ内から表に飛び、構内をカートンが積まれたパレットを運んでいたおれの耳に届いた。その日もコンテナの内ではヘルメットを被らず、カートンが運ばれてくるまで壁に寄りかかつて待機していた佐々木が表に出てきて隣のコンテナを覗き、戸口で浜中と顔を合わせた。垣花も続いた。顎紐こそ締めていなかったが、彼はヘルメットを被っていた。浜中に怒鳴られて緑色のカートンを積んで引き返してきた更科が佐々木の顔を見ると、腰が痛くてえ、と言った。

「生身の身体だ。そりゃあ、たまに手を抜くのは判るが、『吉竹』の五人のなかで手を抜いている者がいると、決まって更科のお父さんだぜ。佐々木くんと垣花くんは身体を惜しまずに働くのにな、『吉竹』は頭数さえ揃えればいいとゴミを混ぜて寄こしやがる」浜中は佐々木に阿るような笑いを浮かべて言った。佐々木は笑わなかった。

「ケツ！」佐々木が唾を吐くような声を発した。

「えっ？」

「お前よ、ぎゃあぎゃあ、煩いんだよ。更科さん、朝から腰が痛いと言っていたんだ、ちよつとぐらい休ませてやれよ。他の連中はちゃんと働いていることだし、そんなに忙しいわけでもなかるうに、更科さん一人がたまたま一休みしたぐらいでどうつてことはねえだろう。それに、お前みたいな男が現場でちよろちよろしているのを見ると、お

れは気分が悪くなつて仕事やる気がなくなつちまうんだ。消えろよ！」佐々木は言いながら二歩、三歩と浜中に詰め寄る。浜中から眼を逸らさない。大柄な身体が、下腹が丸く突き出た小柄な身体に押し掛かる。下請けに突つかかられる、思いもかけないことだったのである。浜中は何事が起こったのか理解できないような狼狽えた表情を見せた。

佐々木から眼を逸らし、隣のコンテナの戸口に停めたフォークリフトの運転席のおれの顔を眺め、ついで大小のトラックが列を成している荷受け、荷渡し場の方に落ち着きなく視線を漂わせた。おれの位置からはよく見えたのだが、垣花が浜中に背を向けてにやつく笑いを浮かべていた。浜中は逃げるように上屋に向かって歩き出した。垣花と視線が合うと、おれは声を出さずに笑った。単調な労働のさなかに何か事が起きると気分が紛れて楽しいものだ。垣花と佐々木は受け持ちのコンテナに帰り、パレットに長方体に詰められた上の角のカートンを抱きかかえ、コンテナの奥へと歩いた。運転席から飛び降り、おれもカートンを抱きかかえた。

「おい、あの浜中の野郎を襲つて腕や脚をへし折るなんて簡単なことだぜ」木箱の上にカートンを載せてから引き返してきた佐々木がおれと擦れ違いざまに言った。

「奴の行動を調べ上げ、ちゃんと計画を練つてよ、奴が暗闇でひとりになったときを狙つて襲うんだ。うまくやりや

「あ誰にも判りゃあしねえよ」佐々木の先を歩いてきた垣花が振り向いて言った。

「横浜に暗闇なんかねえよ」おれは奥に歩きながら言った。木箱まで進んでからきちんと角を揃えてカートンを積み重ねる。上の連中から煩く言われているせいだけではない。やる以上は、仕事は丁寧にするのだ。輸入コンテナを開けたときによくあることだが、カートンや木箱が乱雑に置かれ、荷崩れを起こし、酷い場合は中味が食み出ていることもあるが、そんな仕事をする、自分が内から崩れていくような気がする。

「暗闇がなくてもよ、徹底的に調べればどこかに隙があるはずだ。なっ？」垣花が言った。佐々木が、余計なことを喋るな、と言わんばかりに頸を横に振る。垣花は口を噤む。そのときおれは、佐々木が相手の行動を徹底的に調べ上げ、周到な計画を練って誰かを襲ったことがあるのか？と思った。やったことがあるのか？と佐々木に聞こうとしたが、止めた。そのかわりに、更科さん、「吉竹」を辞めたらどうなるんだらう？と聞いた。

「今は厳しいときだから派遣の口だつてないし、あの身体じゃあ日雇いの声も掛からないだろう。貯えがあればその分だけ食い繋いでいけるが、更科のお父さん、パチンコに注ぎこんでいるってはないだから貯えなんかねえだろう。ともかく前払いで宿賃を払わなきゃあすぐにドヤから追い

出される。遠からずホームレスだな」垣花が言った。

三人は黙々とカートンを運び、積みつける。自分が未だ壊れていないことを示すかのように佐々木と垣花の仕事振りも丁寧なものだった。パレットにカートンが残り少なくなると、おれはフォークリフトに乗り、パレットが空になるのを待つて構内に出てフォークリフトを前進させ、荷受け用に積み重ねられたパレットの山に空パレットを重ね、上屋のエプロンに出された白いカートンを満載したパレットに爪を差し込んで引き返す。持ち場に着く前に隣のコンテナを覗き込むと、更科はヘルメットを被り、緑色のカートンを腹に抱えて運んでいた。歳は四十五、六だが、長年の重労働と飲酒と不規則な生活のせいかわ、もう五十代半ばに見える、痩せて小柄な男だ。おれと視線が合うと、更科は頬を歪めて怯えたような表情を見せ、卑屈さと開き直りが入り混じったような奇妙な笑いを浮かべた。

カートンをコンテナの半分まで詰めると、おれは積み荷プランに指定されたコピーマシンやデスクトップのコンピュータが入った木箱をコンテナの重量バランスを考えながら床に並べ、佐々木たちが角材を打ちつけ、空いた空間を白いカートンで埋める。ふとおれは、三人一組になつて大きさの違う木箱やカートンを組み合わせてコンテナという箱に詰め込むゲームでもやっているような気分になつた。扱っているのが、書面をそっくり違う書面に写す機械

や電子信号によつてたちどころに膨大な情報を処理する機械を収納した木箱ではなく、少しの衝撃を与えても狂ってしまうようにわざと脆くそしてバランスを悪くして難しいゲーム用に作られた木箱だ。ゲームの素材は連日送り込まれ、それらをコンテナに積み込む終わりのないゲームだ。今のところ今日のゲームは完璧だ。だが、完璧にやり終えたと思つたゲームも、コンテナの扉が閉じられ、検数員によつてシールが掛けられ、ストラドル・キャリヤーによつて海側のコンテナ置き場に運ばれ、そして岸壁のガントリー・クレーンによつてコンテナ船の船艙に積み込まれ、海の彼方へと運ばれてしまうのだ。夥しい量の素材が眼の前を流れ過ぎるだけ、虚しいゲームだ。もつとも虚しいといえ、どんなゲーム、仕事だつて虚しいことかもしれないが……。

そのコンテナ詰めが終わると、上屋のエプロンには次のシドニー向けのコンテナに詰められる予定の木枠梱包された電極やボールペンが入ったカートンが出されていたが、三人はチョイ休みを取つた。急ぐ仕事でなかったし、午後一番のコンテナにまだ三分の二ほどしか詰め終えていない隣の作業の進み具合を見ておれが、チョイしようぜ、と指示を出したのだ。陽射しに当たると気持ちよかつたが、表で休むと目立つので、コンテナの入り口とコンクリートの段差にステップを付け、フォークリフトをコンテナの内に

入れ、三人は奥の暗がりに座り込んでおれが自動販売機で買った缶ジュースを飲んだ。オーストラリアから牧草でも運んできたのだろうか？コンテナの床には緑の染みが残り、乾いた草の臭いがした。佐々木がおれに向かつて寛いだ笑顔を見せる。

「何で今日だけ更科さんを庇かばつたりしたんだい？」おれは聞いた。常日頃、動作がのろく、頭が痛いのが痛いと言つて壁に凭れたり床に座り込んだりする更科に対して佐々木は面と向かつては言わなかったが、あいつと一緒にリズムが狂つちまう、と苛立ちを見せたものだった。何日前かに更科が浜中に怒鳴られたときには佐々木は薄ら笑いを浮かべて見ていただけだった。

「今日は更科さんと一緒にあなかつたし、まあ、更科さんのことなんかどうでも良かった。男のくせに甲高い、浜中のあのキイキイ声が神経に触つたんだ。一週間ほど前のことだが、フラット・コンテナに載せたブルドーザーのラッシングに思いのほか手間取つてよ、コンテナ詰め作業に遅れたことがあった。そのとき珍しく浜中の野郎がコンテナに入つてカートンを運んでいやがったが、おれたちがコンテナに入ると、おれにこんなことをやらせやがつて、と言つたんだ。それともう一つ、あの野郎、おれたちのことを、プータロウとかプーと言つてやがつて、何度もおれの耳に入つてきた。そんなことを急に思い出してカツとなつ

た」佐々木は喋った。

「うちの会社でも浜中は特別に、捻生羨みたい根性が振
じれているからな」おれは言った。

「今日は佐々木の虫の居所が悪かったってことだ」垣花が
言った。

「気がつくとべらべら捲し立てていた。このCFSもお仕
舞いだな、と一瞬思ったが、身体に溜まっていた毒素を吐
き出すような快感を覚えて止められなかったよ」

「大丈夫、浜中に他の会社の作業員を誅にする権限なんか
ないよ。鎗田さんがお前たちのことを買っていることだ
し」おれは言った。

「佐々木を怒らせると怖いぜ……」垣花が言った。

「止せよ」佐々木が言う。

それから佐々木と垣花は行きつけの飲み屋のママらしき
女のことを喋った。いつもカウンターの端に座って『ジャ
パン・タイムズ』を読んでいるキザな野郎がどうも芳枝さ
んの男らしいな、と垣花が言うとお前、今頃気づいたの
か？ おれは前々から判っていたぜ、冷静を装っている
が、あの野郎、気がでない眼つきをして芳江さんを眺め
ている、と佐々木が言った。

「芳江さんはそれを承知で客といちゃついているってこと
か？」垣花が言う。

「それはどうだか？ とまかく芳江さんは長者町なんか

た。身体が一気に熱くなって気持ちよかった。背後、二十
フィートのコンテナから、ブレイキの悲鳴とクラクション
の青立ちを聞いた佐々木たちの笑い声を聞いたような気が
した。おれは笑い出したくなった。

「おめえら、トラック野郎は表の道路では我が物顔でいや
がるが、この構内ではそうはいかないぜ」おれは続けた。
フォークリフトのアクセルを踏み込んでパンパーにぶつけ
んばかりに大型トラックの前を横切った。次のコンテナに
は、一番重い電極から詰めるのだ。電極を奥から二段重ね
に並べ、その上に防虫加工を施したベニヤを敷いてポール
ペンが入ったカートンを天井まで積み重ねる……。

*

「でも、偉いわね。近頃、どこかに首までどっぷり浸かっ
ていなくちゃ生きていけない男ばかりでしょう。片足だ
け掛けていつでも飛び出せるってことは素敵なことよね」
テーブル席のソファの佐々木と垣花の間に座った良枝とい
う女主人は大きめな眼を見開いて二人の顔を交互に眺め
ながらいかにも感心した口振りで言った。明日をも知れな
い、ドヤ暮らしの下請け作業員をこんな言い方で褒めるな
んで、商売とはいえずまいもんだ、とおれは感心する。も
ちろん本心ではないだろう。佐々木は三十五歳と言った
が、おれの眼には、細身の身体にゆったりとした黄褐色の

置いておくには勿体ないほど雰囲気のあるいい女だ」佐々
木が言った。

「着痩せしているが、裸になると肉づきが良さそうだ」

二人が声を上げて笑い、おれもまだ見ぬ、雰囲気のある
いい女の裸体を想像して笑った。笑いに意味なんか要らな
い。口や鼻から笑い声を発するだけで気分転換になるのだ。

十五分間が過ぎたのを腕時計で見ておれは、腰を上げ、
フォークリフトに乗った。表は北の風が緩く吹き始めてい
た。埠頭のただなかにいるのに、CFSの上屋や向かいの
保税倉庫に塞がれてここからは海は見えない。微かに油の
臭いが混ざった潮の臭いを嗅ぎ、構内を出て埠頭の道路を
横切れば、保税倉庫と保税倉庫の間から近くに海を見るこ
とができるのと思う。

短い時間でも休むと、再びフォークリフトの速度を上げ
るのが大儀だった。おれは徐々に速度を上げて構内を横切
り、と、構内の奥でブルドーザーの部品の荷降ろしを終え
た十トン・トラックが、構内の制限速度の二十キロを遙か
に超えた、五、六十キロの速度で左横から走ってきてフォ
ークリフトにぶつかりそうになった。おれは慌ててブレ
ーキを踏み、トラックも急停車した。運転席で上体を前後に
揺らした三十年配の色黒の痩せた運転手に向かっておれは
クラクションを二度叩いた。

「おい、こんなかで飛ばすんじゃあねえよ！」おれは喚い

オーバーシャツに灰青色のベストを纏い、薄化粧を施し、
薄い唇を紅く塗った彼女はまた二十代後半に見える。佐々
木の節くれだった右手が彼女の青いロングパンツの左の太
腿に置かれたままだった。

土曜日の夜だった。佐々木たちと飲みたくなっておれが
誘い、佐々木と垣花と七時に関内駅北口で待ち合わせた。
しょぼくれた格好をしていると、気持ちまでしょぼくれち
まう、と佐々木がおれに言ったことがあるが、佐々木と垣
花は仕事を終えてシャワーを浴びると、地べたを這いずり
回っているような服装をする年配の作業員たちと違ってま
るで女と待ち合わせでもしているかのようにいつもめかし
込んで迎えるマイクロバスに乗っている。今夜は折り目の
ついたロングパンツ、ドレスシャツ、スーツ、コート姿で
ネクタイまで締めて駅前に現れた。佐々木たちがめかし込
むのを知っていたので、おれもドレスシャツ、スーツ、コ
ートを装った。ネクタイは締めなかった。

駅の向かいの雑居ビル六階にある居酒屋で生ビールとウ
イスキーを啣り、鳥の唐揚げやおでんを腹に詰め込んだ。
一万円ほどの料金をおれが払って店を出、今度はおれが奢
る、と佐々木が案内し、伊勢佐木町通りを歩いて九時過ぎ
に長者町の雑居ビル地下一階にあるこの「オパール」にや
ってきたのだ。下請け作業員と飲み歩くのは初めてのこと
だった。

「片足を掛けているというよりはやつとぶら下がっているようなものだ。ちよつと振られれば、日本の輸出入が今よりちよつとでもおかしくなれば、すぐ振り落とされちまうってことよ」佐々木がウイスキーのオンザロックを口に入れてから言った。

「振り落とされるのじゃなくて自ら飛び降りるのでしよう。そしてすぐに走り出す」良枝は言った。

「ともかくどこに行ってもお荷物にはならねえってことよ。そりゃあな、ぐじゃぐじゃぶちぶちぶーたれることはあるが、とにかくやる時にはやることをやる。きつちりと綺麗に……」

「そうね、それは見れば判るわ」良枝は感心したような笑顔を浮かべる。そして急に我に帰ったように唇を締め取り澄ました表情を見せた。ちよつと失礼します、と言ひ、立ち、テーブル席から離れ、カウンターの奥でビールを飲んで、髪をオールバックにした、痩せて長身の背広姿の三十代半ばの男の前に行つた。愛想笑ひは浮かべなかつた。暫くしてカウンターの奥から、プータロウ、と言う男の声が聞こえた。聞き違ひかとも思つたが、佐々木が身体のどこかに棘が刺さつたような表情で奥に眼を遣つた。金払いはいいのよ、と言う良枝の声が聞こえた。

「あの野郎、おれたちに聞こえよがしにプータロウなんて言いやがったぜ」佐々木が言った。

会つたことがあるような親しみを覚え、歳の差も忘れて湖南の海へのドライブを誘つた。

「海といえは夏だが、ビュンビュン北風が吹いて白波が立つ冬の荒れた海を暖房が効いた海辺の洒落たレストランのガラス窓から眺めるのもいいもんだぜ……」

「海へオジンなんかと行きたくないよな」垣花が笑つた。

佐々木は、長身の三十年配の男から離れてカウンターの内に入り、五十年配の二人連れの男の相手をしている芳江をしきりに眺めた。

ユカが席から離れ、三人でウイスキーボトルを二本空けたところでおれたちは腰を上げた。割り勘にすれば足りるだろう、とおれが一万円札を出すと、いいから、いいから、ここはおれの奢りだ、と佐々木は受け取らなかつた。佐々木は良枝に三万円払い、良枝が釣りを渡そうとしたが、数枚の千円札と硬貨を佐々木は受け取らなかつた。良枝がカウンターの内から出ておれたちを見送つた。木の扉の前で佐々木がいきなり右腕で良枝の肩を抱き寄せ、両腕で彼女を抱きすくめた。そんなあ、と良枝が鼻に掛かつた声を出した。おれは店を出た。先に階段を上がつたおれに続いた垣花が、佐々木の奴、男の見ている前で良枝さんのあそこをもろに触つたよ、と言つた。

今夜はしこたま飲んだのだが、冷たい風に吹かれるとまだ飲み足りない気がして「丸福」に行こう、ツケが利く、

「えっ？」垣花が言う。

「聞こえなかつたのか？ 野郎を痛めつけてやりたくなくなよ」

「そんなこと、止せよ。何の得にもならない」

佐々木の憤りが判らないでもなかつたが、おれは、折角の土曜日、バカ話に笑い転げたり、好き勝手なことを喚き散らしたりして酔い潰れるまで愉快に飲みたかつた。おれたちのように現場で神経を遣い、身体を張っている者には前夜の不摂生が翌日の仕事にもろに応える。少しの緩みも人命にも係わる重大事故に繋がりがかねないので平日の前夜は酔い潰れるまでは飲めない。飲めるのは休日の前夜だけだ。神経こそそんなに使わないものの、瞬発力や持久力が要求されるきつい筋肉労働に従事している佐々木たちにしても同じことだろう。平日の前夜に汚く酔い潰れているのは、翌日へまをやらかしても身の危険がなく、疲れてぶっ倒れるようなこともない、電子機器のキーボードや紙をいじくつたり、他人に頭を下げたりすることしか能がないような奴らだ。

ウイスキーをどれほど身体に入れたらどうか？ 気がつくとおれは、佐々木や垣花に向かつてへらへらした笑ひを浮かべ、自分でも意味の判らないことを口走つていた。良枝のあとにおれたちの席に侍つた、色白の小さな顔に愛嬌がある、二十歳そこそこのユカという女に以前にどこかで

とおれは誘つた。ケッ！「丸福」なんて「港南」の連中の溜り場じゃねえかよ、えーえ、お前だけは別だが、一週間見続け、土曜の夜にまで元請けの連中の面なんか見たかねえよな、と佐々木が言った。ウイスキーならある、と垣花が彼らの宿に誘ひ、二人の宿を見たくておれは長者町から簡易宿泊所が集まる街へと佐々木たちに続いた。

日雇い労働者や生活保護受給者が多く住んでいる街のドヤのこと、二、三階建ての古びた木造の建物をおれは予想していたが、二人が宿泊している宿は築二、三年の、クリーム色の外装が施された鉄筋コンクリート五階建ての、洒落た集合住宅を思わせる建物だつた。垣花の言では、寿町の多くの宿がそうであるように経営者は日本人ではなく、外国人労働者には寛容だ、ということだったが、果たしてエレベーターで三階の、大森の臭いが充満する廊下の上がると、半開きになったドアの前に立つ色黒で小柄な二人の男がタガログ語らしき言葉を早口で喋つていた。グツナイト、と佐々木と垣花が言い、二人は顔一杯の笑顔を浮かべて、グツナイト、と言つた。一人がおれに向かつて警戒するような表情を浮かべ、おれは締りのない笑顔を浮かべて、グッドナイト、と言つてやった。室内には五、六人の男の姿が見え、ラジカセでも鳴らしているのか、イーグルスの「デスペラード」が聞こえた。流行の洋楽だ。「佐々木のテーマ・ソングだ。デスペラード、ならず者つ

て意味だ。米軍基地の街の酒場でこの曲が鳴り出すと、海兵隊員たちがいっせいに合唱するんだ」垣花が言った。

二人が借りているのは、東の角のキッチン、トイレ付きの八畳の部屋だ。男同士が住んでいる部屋のこと、取り散らかっていることだろう、と想像していたが、白いレースのカーテンが掛けられ、クリーム色の壁には赤と白の花を飾った鍔広の帽子を被った細面の娘が描かれたカシンヨールの版画のポスターが貼られ、二十インチのカラータレテレビとラジカセ、電気ストーブ、掃除機が置かれた部屋はきれいに掃除されていた。保証人に印鑑を押しもらったたり、礼金や敷金を用意したりする必要がない、三千五百円さえ払えば誰でもその日から泊まることのできる部屋だ。

テレビの上には、背広姿の男を中心にラグビー・ジャージーを着た、坊主頭の二十人ほどの十代後半の少年たちが写されたキャビネサイズの写真が写真立てに入って飾られていた。後列に立ち、カメラではなくどこか遠くを見ているような表情をしている一際大柄な少年に佐々木の面影が見られる。垣花がラジカセからキース・ジャレットのピアノを鳴らした。三人は八百ワットの電気ストーブを囲んでウイスキーの水割りを飲んだ。今晩は泊まっていけよ、と垣花が言い、寒さのなかをタクシーが拾えるところまで歩くのが億劫に感じられ、そうするよ、とおれは言った。佐々木がおれの顔を見た。

よ、と佐々木の肩を揺すった。佐々木はのろくさと起き上がり、黒の格子縞のパジャマに着替え、蒲団に潜り込んだ。垣花が畳に脱ぎ捨てられた佐々木のパンツやスーツを丁寧に畳み、衣類が吊るされて衣装の収納場所になった押入れの上の段に収めた。

「佐々木の女房みたいだぜ」おれは笑った。

「もう一年半も前のことなんだが、佐々木とは太井埠頭の現場で知り合った。歳も同じでその日から不思議と気が合ってた。おれたちのような仕事をやっていると、服装に構わねえ連中が多いんだが、佐々木は服装に金を掛け、一旦仕事が終わると、きちんとスーツを着てネクタイまで締めたよ。おれの服装に関しても煩いことを言い、おれもお洒落するようになったんだ。佐々木は誰かに追われているかのように川崎の安宿を転々としていたのだが、半月もすると蒲田のおれのアパートに転がり込んできた。来るなり隅から隅まで塵ひとつ残さないように掃除を始めたよ」垣花は口が小さく開けられた佐々木の寝顔を見ながら言った。

「佐々木の奴、高校を出てからは何をやっていったんだ？」おれは聞いた。垣花に何度も尋ねた質問だ。

「がちがちのお堅いところに勤め、真面目に働いていたのだが、競馬、競輪などのギャンブルに狂い、サラ金に手を出し、金融会社がつこく付き纏うようになった。百万単位の金を手にするには退職金を当てにするしかなくなっ

「一年の秋には脚の速さを見込まれてレギュラーに抜擢され、ウイングをやらされた。二年になったときから体重が増えて第一列でスクラムを組むようになった。ウイングのときは競走馬にでも、スクラムを組んでいるときは暴れ牛にでもなった気分だった。潰したり潰されたりしたが、弱音は吐かなかった」佐々木は写真を見上げながら言った。おれは相槌を打つ。

「脳味噌がアルコール漬けになった、とんでもない親父がいてな、三年の夏頃から家の生活費もろくに小さくなってよ、おれが早朝の青果市場や夜の中華料理屋の厨房でアルバイトしなくちゃあならなくなったんだ。高校はなんとか卒業できたが、大学なんて夢物語だった。早稲田で左プロップをやっていた老松って知ってるか？ 高校時代、奴はおれと一緒にスクラム組んでいたが、おれより押しが弱く、ボール捌きも下手だったよ」佐々木は言った。おれが初めて聞くことだ。

「昔のはなしだ」垣花が言った。

「そう、遠い遠い昔の愚痴ばなしよ」

それから佐々木は水で割ったウイスキーをグラスに二杯飲み、空のグラスを畳に置き、仰向けになったかと思と、たちまち寝息を立てた。垣花が押入れの下の段から蒲団一式とパジャマを出し、洗剤の匂いがする、洗い立てのシートで蒲団を包み、蒲団を敷いてから、お前、風邪引く

た。よくあるはなしよ」垣花は言った。

「がちがちのお堅いところか？」

「おれたちもそろそろ寝ようぜ」

*

通関済みの輸出貨物、未通関の輸入貨物、法的に言えば外国貨物を長方体の箱に入れ出しする日々が続いた。冬が進むにつれ「吉竹企業」の更科がすぐに息を切らしてコンテナの床に座り込んだり、あるいは作業のさなかの現場から姿を消したりすることが多くなった。同僚の柳井や粉山は、いない方がいい、近くで下手に動かれちゃあかえってペースが狂う、と不平を言い、元請けの年長者たちはだらけた更科を見るたびに面白半分のように罵声を浴びせた。メラニン色素が沈着した顔がますます黒くなり、更科は内臓でも患っていたのかもしれない。

近いうちに来なくなるだろう、と思っていたが、更科は一月、二月と殆んど休むことなくCFSに出動して何となく日当を稼ぎ、そして三月から来なくなった。コンテナの水洗いか船艙の掃除など、港湾でも比較的体力を消耗しない現場にでも廻されたのだろう、と違って佐々木に聞くと、年配者向けの楽な仕事に空きはなく、更科は「吉竹企業」を辞めさせられたということだった。佐々木たちのドヤの近くの、一泊千五百円の、木造モルタル造りの三畳一

間に泊まっていたが、そこからもいなくなった……。

柳井が四月の初めから、会社に連絡もなく、現場の仲間
の誰にも一言も言わず来なくなったのは、意外だった。

「吉竹企業」の者が訪ねると、何年も住まいにしていた簡
易宿泊所の柳井の部屋は引き払われていた。求人広告を丹
念に見たり知人に頼んだりして前々から職を探していた、
どこかにちゃんとした口を見つけたのだろう、と垣花は言
った。いや、奴がやっていたような危ない仕事は簡単に抜
けられるものではない、昔の仲間に脅されて再び危ない仕
事に手を出さざるを得なくなったのだろう、と佐々木は言
った。もちろん本当のところは判らない。ともかく「吉竹
企業」の男がまた一人来なくなったということだ。下請け
の作業員がある日から突然来なくなり、宿からも姿を消す
のは珍しくはない。

おれにとつてもっと意外だったことは、春になればいな
くなるだろう、と予想していた佐々木と垣花が、冬が過ぎ
春になっても休むことなく働き続けていたことだった。相
変わらず佐々木の方は、相手が元請けだろうが気に喰わな
い者には挨拶もせず、その日の気分で露骨に不機嫌な表情
を見せて下請けという立場を弁えないところがあつたが、
やることはきちんとこなしていた。以前はおれたちの指示
を仰いでいたのだったが、様々な形態の貨物を組み合わせ
て詰めるコンテナ詰めの際に、貨物の損傷防止や全体の重

量バランスを配慮し、フラット・コンテナにブルドーザー
や機械物のパーツを繫索する際にも、航海中の荒天を考慮
して職人染みたこだわりを見せ、どうだ、綺麗なものだろ
う、仕事は綺麗にやらなくちゃあ、と成果を誇つたものだ
つた。

歳も今がぎりぎりのところだ、同じ働くのなら先が見え
るところで、と四月の初めに佐々木は鎗田組長に再度「港
南船舶」入りを誘われたが、断つた。

緩い南風が吹く、四月半ばのその月曜日の朝一番におれ
は、現場に出て作業開始の合図でもあるかのようにフォー
クリフトのエンジンを吹かし、排気ガスの臭いを嗅ぎなが
らローラーチェインに油を差し、脇からレバーを操作して
爪の上げ下げを試した。二十フィート・コンテナを改造し
た作業員室から下請け作業員たちが現れ、と、佐々木の姿
が見えなかった。垣花がいつもの朝と同じように寝不足気
味の気怠い表情をし、足を引き摺る歩き方で近づき、よお！
とおれは声を掛けた。

「今日はどうだい？」垣花が言った。

「まあ、ぼちぼちだよ。ラッシング作業はないし、頃合い
を計りながら片付けちゃおうよ。ところで佐々木は？」

「腹の調子が悪くて」

「何を食ったんだい？」

午後二時過ぎからの作業で、豪州から来た、中華料理用

に使う鮑あわびの缶詰がニダース入ったカートンを五百、二十フ
イート・コンテナから出したあとに垣花は、汗に塗れた作
業シャツ姿で表に出てコンテナの日陰に腰を下ろし、ヘル
メットを膝に置き、缶ジュースを飲んでた。更科と柳井
が辞めたあとに入つた四十年配の二人の作業員とは気が合
わないかのように離れていた。おれは鮑のカートンを積ん
だパレットを上屋のエプロンまで運び、空パレットに爪を

差してコンテナに引き返した。垣花が腰を上げ、牧草の種
が入つた袋物を出す次の作業に取り掛かろうとした。急ぐ
仕事ではなかった。一息入れたくて、チョイししようぜ、と
おれは言った。垣花は腰を下ろし、おれは彼の横に座つた。

「『オパール』にいた、背が高く痩せた、店のママの彼
氏だという男を覚えてるかい？」垣花は言った。

「顔までは詳しく覚えていないが」

「椿原というのだが、そのヒモ野郎が福富町の焼鳥屋から
の帰り、根岸の住宅街の高台でタクシーを降り、プロック
塀に挟まれた、細く急な石段を登つていたときに何者かに
襲われたんだ。いつもは点っている街灯が消えていた。背
後に足音を聞いたと思うと、振り向く間もなく野郎は後
頭部を殴られ、意識を失つた。何分かして意識が戻ると、
石段にうつ伏せに倒れていて、後頭部、腹部、右の頬、左
の太腿に激痛を覚え、右手の中指が突き指をしていた。後
で思い出し、倒れてからも上体や顔を蹴られたような気が

するが、定かではない。野郎は立ち上がることもできず、
石段を喘ぎながら這つて登り、近くの民家に辿り着いて救
急車を呼んでもらつた。ズボンの後ろポケットに収めた、
四万ほどの金が入つていた財布が抜き取られていた」垣花
は声を潜めて話した。

「やけに詳しいじゃないか。本人から聞いたのか？」

「いやー、良枝さんからだ。土曜の夜に店に行つたときに」

おれは一月の土曜の夜に「オパール」で佐々木が、野郎
を痛みつけてやりたくなつたよ、と言つていたのを思い出
した。まさか佐々木が？

「行動はいつも佐々木と一緒になのか？」おれは聞いた。

「いやー、いつも一緒つてわけじゃないさ。佐々木は一人
になりたいときがあるし、おれもそうだ」垣花は言った。

椿原という男の傷の程度を聞くと、レントゲンで診ると骨
折はしていないが、腫れが酷く、吐き気があるので磯子の
中央病院に入院しているとのことだった。

その二日後に佐々木が出動してきた。腹の調子は大丈夫
かよ？ とおれが言うと、病み上がりだからこき使うなよ
な、と佐々木は笑つた。北米西岸航路の四十フィートのコ
ンテナ出しが七本予定された日だった。午前四本をこな
し、昼休みにおれが表に出ると、佐々木と垣花が他の下請
け作業員たちとは離れ、空パレットに座っていた。二人は
仕出し弁当を腹に詰め込み、春の陽射しを浴びて上機嫌な

顔をしていた。

「おい、仕事をやるには勿体ない気候だ。海の見える公園でビールでも飲みたいな」佐々木が言った。垣花が笑う。

「先は見えている。もう少しの辛抱だ」おれは言った。

「春の陽気って変わりやすいが、今月一杯この陽気が続けばいいよな」垣花が言った。

「今月一杯？」

「おれたち、今月で辞めることになったんだ。箱屋稼業から足を洗う」垣花が言った。来るときが来た、とおれは思った。近いうちに二人のどちらかが、辞めるよ、とさりげない口調で言うのを春になる前から予想していた気がしたのだ。佐々木がおれの眼を見詰めて頷いた。

どこに行くんだい？ とおれが聞く前に、二人で茨城に行くことになった、と垣花が言った。

「パワー・プラントでの夜勤で、様々な機械のメーターをチェックする仕事だ。給料、そう、給料は夜勤手当が付くから悪くはない。折角鍛えた筋肉を鈍らせるのは残念な気もするが、CFSを離れるとなると解放された気もするし、新しい土地に移ると思えば胸が躍るよ。ゴールデンウィーク明けから勤める」

「茨城のどこなんだ？」

「……」

「この歳では生まれ変わった気になれるわけでもないし、でも起こしたりしない限り長続きするものだけ」佐々木が言った。

あるいは佐々木の言う通りかもしれない。歳を食ってもうどこにも移る当てがなくなり、黒線を増やしたヘルメットの下で、何も判っていないのに世の中のことを判りきつたようないっばしの顔をして港の荷役会社にしがみついている姿を想像した。あり得る……。

腕時計を見て一時丁度におれは金網フェンス沿いの一番南側に置かれた四十フィート・コンテナのシールを切り、扉を開けた。カリフォルニア・ワインのカートンが床から天井まで積まれ、幾つかの瓶が割れているらしく、黴臭いワインの臭いが漂い出た。酒類に関しては税関が煩く、割れた瓶の本数を検査しなければならず、検数員は忙しくなりそうだ。従って作業効率も悪くなる。佐々木と垣花が損傷を確かめながらカートンをパレットに載せ、扉を開けたばかりで参加する空間がなかったたのでおれはフォークリフトの運転席で作業を見守った。

構内の奥の広場では木枠梱包されたコピーマシンが、同僚の佐原が操作するフォークリフトによって降ろされていった。重心が高く安定が悪い貨物だ。フォークリフトの爪の当たりどころが悪いとすぐに傾いだりずれたりするので、荷台で運転手が充分に爪が差し込まれるまで貨物を押さえつけていた。フォークリフトは貨物を少し持ち上げてから

新しいところは新しいところで色々あるだろう。何かを失い続けながら転がっていく。結局のところ、どこに行き着くのだろうと思うよな……。ところでお前、五年もして本牧に来てみると、ヘルメットに黒線を増やしていっばしの兄い面をしているだろうな」佐々木が言った。

「そんなあ、この先五年も『港南』に居続けるなんて思ってもいないよ。おれもお前たちと同じようなもので、私の一生を会社に捧げますってわけじゃない。フォークの免許さえ持っていれば、他に稼げる場所はあるし」おれは向きになった。これから四年も五年先も今の会社に勤めるなんて心に決めていなかった。といって新しい職を探しているわけでもなかった。ときに数百万もする貨物を扱うことがあり、以前は身が竦み上がるような思いがしたものだ。慣れてしまえば平然とした気持ちで貨物に向かうことができる。おれの年齢としては悪くない金を稼げるし、とりあえず今のところは港の荷役会社に安んじているというだけのことだ。

「港南」の若い連中は同じようなことを言うよな。下請けやトラック運転手に対しては、おれは元請けだって顔をしているのによ、自分の会社を軽蔑した口振りで、こんなところ、長居するつもりなんかねえや、とな。だがな、一旦腰を落着けてしまうと、安定したところから出るにはそれなりのエネルギーが必要だし、ぶん殴られたり大事故後退し、地面すれすれまで降ろし、ゆっくりと構内を進み、上屋のエプロンに上げると、真っ直ぐ後退しながら慎重に爪を抜く。それぐらいのことは「港南船舶」に勤めて二年以上の作業員なら誰にもできることながらも、佐原の奴、見事だな、とおれはあらためて感心する。少しでも雑念があればああはいかない……。

構内入り口の守衛室の横から、四十トンまでのトラックの重量を量ることができると計量秤が設置されたコンテナ置き場の入り口まで二十や四十フィートのコンテナを牽引したトラックが列を成していた。守衛室とトラックの間を抜けて神奈川県警のパトカーが構内に入ってきたのを見たときおれは、コンテナ置き場の方で何か事故でもあったのか？ と思った。事故が起きたらちまちまここまで知れ渡るはずなのだが……。あるいは埠頭を巡回中の警察官が事務所脇の自動販売機で缶ジュースでも買うためか？ パトカーは事務所前の来客用の駐車場の端に停まり、刑事らしき背広姿の二人の男がパトカーから出て事務所に入った。パトカーにはもう二人、制服を着た警察官がいて、運転席の一人が無線で話していた。後で知ったことなのだが、そのときには守衛室の表のフェンス際と日頃は閉じられている構内の北の出入り口の前に、さらに二台のパトカーが待機していた。

佐々木と垣花はカートンの壁を上から崩してはワインの

カートンを選んでパレットに積み続ける。積荷目録を見ると、カートンは千二百あり、五分が、十分が過ぎてもコンテナ内のカートンが減ったように見えず、ふと、おれたちは終わりのない作業に従事しているような気がした。

「それを外して。黒い染みがあります」二十二、三の検数員が佐々木に言った。

「あっ！ そうだな」佐々木は言い、カートンをパレットの脇の地面に置く。饅^マえたアルコールの臭いが一際強く漂う。誰が見ても気づく貨物の損傷を見逃すなんて佐々木には珍しいことだった。縦三列、横四列の配列で五段、六十のカートンがパレットに積まれると、おれはレバーを引いてパレットを持ち上げ、フォークリフトを後退させようと振り向いた。と、フォークリフトの進路を塞いでパトカーが止まっていた。よその職場に勝手に入り込んできやがって、邪魔なんだよ、とでも叫びたかった。が、声は出ない。パトカーから背広姿の私服が二人、制服が二人の警察官が出てきた。彼らの顔から昂ぶりと怯えが入り混じったような表情が見て取れ、制服の一人が険しい眼をおれに向け、自分が何か罪を犯し、彼らがおれを捕まえに来たような思いがした。いや、おれは法に触れるようなへまをしていない……。どうしていいか判らなかつた。ただ運転席に座っているだけで、気がつくと、フォークリフトが不意に動き出すのを怖れていたかのように右手でブレイキ・ロックの

レバーを引いていた。

佐々木が段になったカートンの壁を背にし、構内の奥を眺め、両腕を垂らして突っ立っていた。彼の姿に、いつもと何かが違うのに気づいた。が、瞬間それが何か判らなかつた。垣花が佐々木の耳に何か言う。おれは何が違うのか判った。コンテナの内ではヘルメットを被らない佐々木がいつの間にか目深に茶色のヘルメットを被り、顎紐まで締めていたことだった。コンテナ内の作業に急に怖気づいたのか？

背丈は佐々木ほどあろうか、大柄な背広を着た男と、小柄な制服を着た男がフォークリフトの両脇を通ってコンテナの入り口の左右に立った。

「米本孝則だな。東京地検からお前に、工藤克俊に対する暴行傷害容疑で逮捕状が出ている」私服が言い、背広の内ポケットから紙を出し、佐々木の眼前で翳した。

「米本なんていう男はいねえよ」おれは思わず口走った。誰も聞いていない。

「どんな恨みがあるか知らないが、街灯を壊し、暗がりて男を襲うなんてよくないことだよな」私服が言った。佐々木は両腕を垂らして突っ立ったままだった。制服が二歩、三歩と正面から佐々木に詰め寄り、佐々木が頬を歪め、ヘルメットに隠れて眼まで見えなかつたが、それが笑ったようにも見えた。と、佐々木は右腕を僅かに引いて反動をつ

しても警官のタックルをかわした孝則のステップワークは見事だったよな。初めて見た」垣花は言い、構内の奥に眼をやり、陽射しが眩しそうに眼を細めた。



牧港誠之

まきみなと まさゆき

1943 生
法政大学中退
横浜の老舗ホテルのフロント係、団体職員などを経る現況 毎年八重山の珊瑚礁に潜っています。若い頃にセルバンテスに酔ったようにガルシア・マルケスの「百年の孤独」を原文で堪能する目標にスペイン語を勉強おす予定です。

受賞の言葉

牧港誠之

「この野郎、馬鹿力を出しやがって」

「元警察官のくせに、お前、警察の面汚しだ」

制服と私服は言い、小太りの制服が右膝で佐々木の左脇腹を蹴上げた。佐々木は、ウッ！ と声を発した。

「痛いだろうな」フォークリフトの運転席に身を寄せるように近づいてきた垣花が言った。

「『オパール』にいた椿原とかいう男が襲われた事件とは関係ないよな」おれは言った。

「ああ、おれと出会う前に東京で起こした事件だ。それに

大震災からおよそ七カ月半後の秋の午後に横浜・山手にある県立神奈川近代文学館で催された、我が尾道市立土堂小学校の大先輩で、住まいもすぐ近くだった林芙美子の展示会を見に行きました。大先輩の凄まじさに心打たれ、何かしらパワーを貰ったような気がしました。

それから丁度一週間後の文化の日に五十嵐編集長から受賞の報せを頂きました。パワーだけではなく、大先輩に運も貰ったような気がします。審査員の皆様に感謝しています。